
こんな、横島忠夫はどうでショー!!

乱

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者また
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

こんな、横島忠夫はどうでショー！！

【Zコード】

Z3673V

【作者名】

乱

【あらすじ】

これは作者の乱がその妄想と煩悩を融合させて書きあげた様々な
世界の横島の短編集です。基本的にプロットなどは立ててはいません
よ。元ネタとなつた話はTINAMIIやArcadiaに投稿して
いて、Night Taikerからもネタを引っ越して来まし
た。

G × S！なTick！Tack！1（前書き）

この話はもしもG × S！なTick！Tack！な展開があつたとしたらというifの物語で「G × S！夕陽が紡ぐ世界」本編とはつながりの無い別の話です。なので本編では過去において横島とフォーベシイ達が出会いってたと言つ事はありません。

G × S-なTack! Tack! 1

「忠夫さま。今日はお母様が昼食を作つて下さるやうです」「へえ、そなんだ。そう言えばセージさんの食事を食べるのは“こつち”では始めてだな。で、フォッちゃんは?」

「お父様は何か本邸に用事があるらしく魔界に帰っています」

横島は今、魔王邸に居る。

シアや稟に楓達は其々に用事があるらしく此処に居るのは横島にネリネ、そしてネリネの母親のセージの三人だけである。

横島の言つ『こつちでは』と言つのは実は横島・ネリネ・麻弓・樹の四人はネリネの家にあつた鏡型の次元転移の魔法具の暴走によって過去の魔界へと飛ばされた事があつたのである。

其処で過去のフォーベシイ達に接触した事により歴史に僅かな狂いが生じ、ネリネが生まれない歴史に書き換えられるかも知れないと云つた事態になつた。

過去の魔界では色々な事があつたが、何とか歴史通りにフォーベシイとセージは結ばれる事となり、横島達が無事に元の時間に戻つて来てから数日が立つていた。

まあ、過去の魔界では横島的にも“色々”あつたのだが……

「何がともあれ」

ヒヨイツ

「ひやつ……た、忠夫さま……」

横島はそう言いながら横に座っていたネリネを横向きに抱え上げ、（いわゆるお姫様抱っこ）自分の膝に座らせる。

「ネリネが無事で良かつたよ」

「は、はい。私もこうして忠夫さまと会うれて幸せです」

ネリネもまた、そんな横島の胸に寄り添いながら赤く染まった顔を横島に向か、ゆっくりと目を閉じる。

「ネリネ……」

横島もそんなネリネに顔を近づけ、唇を重ねようと……

「ノンノン

「うわっ……」

「あやつ……」

した所に部屋の扉をノックされる。

「ネリネちゃん、忠夫君。昼食の用意が出来ましたよ

そう言いながら扉から顔を覗かせるのはセージ。

横島とセージは過去での出会いが最初だったが、今では家族同様に付き合っている。

あの時から本来の時間では20年立っているのだが髪が伸びた事以外は全く変化が無く、未だに十代と言つても違和感のない若々しさ

である。

そんなセージの視線の先には今までにキスの寸前だった二人が固まっていた。

「あらあら。もしかしてお邪魔だった？」

「いえっ！－ちよど行こうと思つてた所です／＼／＼」

「うやうやしく、おまかせください。」

卷之三

セージはニヤニヤしながら一人を見つめ、横島とネリネは何も言えずには赤くなるだけだった。

そして三人は食堂に移動する。

「やめ食べやがつよ」

ヘラスガ

「ブツ」

卷之六

－ななななな
－？

そのセージの言葉に動搖していた一人だつたが、一瞬早く意識を覚醒させたネリネは横島の首根っこを掴んで部屋の隅に移動する

（た、忠夫さま、お母様の記憶は文珠で忘れさせたんですね？）
（あ、ああ。わざと帰つ祭」【七】の文珠を渡してやござ）

(渡しあだけなんですか?使わなかつたんですか?)

(はあ… 何で忠夫さまは女の子の気持ちにそこまで鈍感なんですか

?

(い、いや、さすがに、結婚前には“あの記憶”は消すだろ？…)

そんな一人にセージは笑顔のまま話しかける。

「どうしたの、一人とも？」

いえ、何でもない！」

「アーティスト」

「ひよつとしてこれの事かな？」

ג נ ט כ

セーリングの甲板の上には【忘】の文珠が光っていた。

「忠夫様からいただいたものですもの。お守り代わりに大事にして
ましたよ」

「何ですか？ネリネ様」

セージの笑顔はあの時のままだつた。

「 そう言えば私の料理を食べていただくのは 20 年ぶりになる訳ですよね。忠夫さま、久しぶりの私の手料理は美味しいですか 」

そんな微妙な空氣の中、横島は氣になる事をセージに聞いてみた。

「し、しかし何で記憶を消さなかつたんスか？」

「あら、女の子にとつての初めでは大事なモノなんですよ。ましてやそれが、自分の意思で捧げたモノならなおさらです」

「まあ、否定はしませんが。というよりお母さま、文珠で記憶を消さなかつたという事は忠夫さまとの事は最初から知つてたんですか？」

「ええ、知つてたわよ」

「ならおじさんも？」

「はい、わざわざ教えて歴史が変わるのを恐れて黙つてただけで、忠夫さまがネリネちゃんを救つてくれるのも知つてましたよ」

「そうつスか」

「ただ、その為に平行世界に飛んでしまう事を知つていながら何もしてあげる事が出来なかつたと後悔してましたよ」

「それはいいんです。そのおかげといつては何ですが美神さんやおキヌちゃん、ルシオラにも会えたんですから…」

「そうですか、私も会いたかつたな。ルシオラさんに」

セージは横島を優しい目で見つめながらそう言つた。

そんな中、横島はふと頭に浮かんだ疑問を口にした。

「……ちよつと待て……ネリネ、一つ聞くがアイさんはあれからどうなつたんだ？」

「はい？……そういうえばアイもまはづりと独身を通されて…」

「呼んだ？」

其処に、笑顔と共に現れたのはあの頃と全く変わらないアイであつ

た。

「うわっ！ア、ア、アイ……さん？…」

「ア、アイさま！？」

「ふむふむ」

アイは微笑みながら横島に近づき、

「は、はは
「じゅじゅ」

横島の体を回りながら見回し、

「ぺたぺた」

横島に触れ、その感触を確かめ、

「くんくん」

横島の匂いを嗅ぎ取つて行き、

「ア、アイさん／＼／＼
「ア、アイさま、何を？」

笑顔で指を花丸を描く様にくるくる回す。

「うん、花丸で合格。間違いなく忠夫くんだ
「お、お久しふりっス」

そしてアイはもう我慢が出来ないといった感じで、瞳を潤ませながら横島に抱きついた。

「やつと、やつと会えた。忠夫くん… 20年は長かったよ…」
「アイさん、また会えて嬉しいっス」

そう言って横島も優しくアイの肩を抱いた。
そんな一人を優しげに見守っていたネリネだが、ふと頭に浮かんだ疑問を聞いてみた。

「アイさま、あのひょっとして忠夫さまに…」
「うん、愛してもらつたよ。ね、セージさん」
「ア、アイさま！――／＼」

セージも、まさかネリネの前でぱりすとは思つて無かつたのか顔を真っ赤に染め上げる。

「お、お母様！アイさまとも！？」
「ふ〜ん、『お母さまとも』ねえ。実の子供だつたという事を知らなかつたとはいえ。セージさん、親子丼なんて大胆ね」
「――／＼」

横島は横島でただ呆然と混乱していた。

「やあやあ、何やら賑やかだね」

其処にのほほんとした笑顔で現れたのはネリネの父親でセージの夫でもある魔界の王、フォーベシイである。

「お、お父様、魔界に用事があったのでは？」

「うん、あつたよ。だからアイちゃんが此処にいるんじゃないかな」

「じゃあ、パパの用事つて」

「アイちゃんのお迎えだよ。いつまでもアイちゃんを仲間外れにしてる訳にもいかないだろ?」

「そういう事だからこれからは私もよろしくね」

「ははは……よ。よろしくっス」

「楓さん達への説明が大変ですね……」

そしてフォーベシイは横島の肩に手を回し、ハイペロン爆弾級の爆弾発言をかましてくれた。

「まあ、これからもよろしく頼むよ忠夫ちゃん。何しろ僕達は『ある意味兄弟』なんだからね」

「はい?…………あんた、知つとつたんか――――いつ――?」

「お、お母さま……」

「だって、さすがに隠したままには出来ないわよ

三世界は今日も平和であった。

「うやんちやん　」

END

G × S-なTick!Tack!-1(後書き)

と、言い訳であります。

ちなみにこの横島はリコリストのイベント以外はフルコンプしているらしいです。

G×S-なTack!Tack!2

「アイちゃん、お久しぶり
リアちゃんもお久しぶりね」

アイが来たと聞いてコーストマの妻でシニアとキキョウの母親のサイネリアがやつて來た。

「つか、リアさんもある時の記憶を持つてたんスね」

「内緒にして『ゴメンね、忠夫くん』

サイネリアが過去の魔界で横島やネリネ達と出会っていたと聞いて、コーストマは何やら仲間はずれにされた子供の様に?れていた。

「何でえ、何でえ、まー坊もサイネリアもよつ……、そんな大事なこと俺に内緒にしてるなんて水臭えじやねえか」

「ははは、仕方ないじやないか神ちゃん。事が事だけにあまり噂を広める様な事はしたくなかったんだから」

膝を抱えていじけてくるコーストマの肩をフオーベシイは優しく叩きながら慰めている。

そんな時……

「陸ト、ちよっと(三時間ほど)お風呂をお借つしてもいいですか?
?」

「アイちゃん、お風呂入るの?私も入ろうつかな」

ザワワツ……

楓や稟達は平然としているが、麻弓や樹、シア達は驚いている。
アイは無類の風呂好きで、一度入ると〜3時間は当たり前の様に入つたままで、それを一緒に入つた者にも強制するので、サイネリアが自分から一緒に入るといつとは思わなかつたからだ。

「わうだ、忠夫くんも“久しぶりに一緒に” 入るうか？」

ザワワワワワッ！？？

そんなサイネリアの言葉に辺りは騒然とする。

当然であろう、“久しぶりに”と言つ事は以前、つまり過去に飛ばされていた時に一緒に入つた事があると言う事なのだから。

「ど、どいつ話う事なんでえ忠夫殿！？」

「タダくん……、OHANASHIしてくれるかな？……」

「忠夫！…き、君と言つ奴は……ネリネちゃんが大変な時に俺様を差し置いて一体何をしていたんだい？」

「忠夫くん…不潔なのですよ！…」

「ヨコシマ……、私とも入つてくれた事は無いくせに…」

「さあ、隠し事はせずにちやつちやと本当の事を……忠夫殿？」

勢によく捲し立てるコーストマ達とは逆に横島はネリネの膝にしがみ付いて何やら怯えていた。

「お風呂キライ、お風呂キライ、お風呂キライ、お風呂キライ…」

「…………リンちゃん、忠夫くんどいつしたの？」

「あはは…、どうも神魔人形態の時に散々お風呂で弄り回されたみたいでトラウマになつてゐらし〜です」

「……なるほど……」

ちなみにどさな事があつたかと言ひと……

此處は過去の魔界のフォーベシイの館。
そして、その浴場の前の廊下。

「あー、せっぱつした。まつたく、アイぢゃんてばお風呂歸いんだ
から。しかも一緒にいると自分が出るまで付き合はされるからアイ
ちゃんが出るまで待たなければいけないし」

(まつたく……)

横島は未来においてシアの母親となるサイネリアが風呂から上がる
のを待つて浴室に掛け込んだ。

「よつやく風呂に入れる。この所ムズムズして仕方がなかつたんだ

横島は服を脱ぎ全裸になると【開】の文珠を使って神魔人形態にな
り、背伸びと同時にその翼を思いつきり広げた。

『うへへん

その体は女性の物になり口調も女性のそれになる。

『この姿じゃないと羽は出せないし面倒くさいのよね。しかも一人
じや洗いづらいし、だからと言ってネリネ達に頼むと散々弄られ回
されるから一緒にに入れないし……とにかく早く洗わなきゃ誰かが入
つてきちゃ……』

其処に、『一時間ほど前に三時間ほど風呂に入つていて』、今は部
屋で休んでいる筈のアイが入つて來た。

「やつぱり、もう一回入っちゃお」

『…………うから急いでと思つた矢先に……』

「…………」

そして二人は全裸同士でお互いに見つめ合う。

横島はこの状態では女性の意識が強くなる為、女性の裸を見ても興
奮したりはしない。

アイは既に横島が神魔人として女性の姿になれる事は説明を受けて
いて知つていたが、羽根を持つている事までは知らずにいたので背
中から羽根を生やしている横島を見て呆然としている。

『…………あ、あの……アイさん……』

「…………ひよつとして忠夫くん？」

『…………はい……』

「『…………めんなさい。私、気付かなかつたわ』

そう言ってアイは浴室から出て行つた。

『た、助かったのかな?とにかく今のうちに…』

と、思つた矢先にアイはリアを連れて戻つて來た。

「うわ〜、本當だ。綺麗な翼」

「でしょ。さあ、洗つてあげましょ」

『え、ええ〜〜!ち、ちょっとアイさん、何をするつもり?』

「何つて、一人じゃ洗えないけど私達には頼みづらくて一人で洗おうとしたんだよね。

大丈夫よ、私達がしつかり洗つてあげるから」

「嬉しいなー、私小さい頃、絵本を見て天使様の羽を触つてみたかったの。夢がかなつて嬉しいわ、これも日頃のラヴの賜物ね」

『い、いや、一人で大丈夫よ。だからわざわざ一人で入つたんだから』

横島は背中の翼を庇うように後ろ向きで逃げながら下がつていいくが無論、それを許すような二人ではない。

「大丈夫、大丈夫、たっぷりラヴァを込めて洗つてあげるから」

「そうよ、綺麗にしてあげるから安心して…諦めなさい」

『諦めろって言つたーー!』

手をワキワキさせながら近づいて来る一人からジリジリと下がりながら逃げようとするが

いくら広いと言つてもやはり風呂場、壁はやはり存在する。

「つーかまえたつ」

『や、やめて。私、翼は敏感で』

サワツ

『ひやんつ!』

—
—
—
—
—

力チリツ

二人の頭の中に、何かのスイッチが入った。

『や、やめて、お願いだから。許してえ~~~~~。』

元は男の二がのに大きが勝れ

「それは許せないわね、もっとよく調べないと

「まあ、本格的に渋二ねよ」

「忠夫さま、何があつたんですか？」

部屋のベットでネリネに介抱されながら横島は呴いた。

『……お、お風呂…』

「お風呂が心うじたんですか?」

『……お風呂……キレイ……』

「あ~、向となく解りました……」

へとへとの横顎と逆にアイとコアの肌はツヤツヤだったやつな。

「そんな事があったんだ」

「お母さんったら……」

「だつて~~~」

そんな穏やかな、別の世界でのお話を。

G × S-なTICK!Tack!-3(前書き)

とつあえず、TICK!Tack!-ネタはこれで終わりの予定。

横島達が過去の魔界から帰つて来て数日後の夜……

「うふふ、エ、ロ、シ、マ」

「タ、タマモ? な、何をするつもりじゃ……?」

タマモは楓達が寝静まつたのを確認すると下着姿で横島に覆いかぶさつて来た。

「何をですつて? 解つてるべせに

「は、はははははは……」

タマモは正直もう我慢の限界に達していた。

横島は自分には手を出さないぐせに、ネリネや楓とはじょひちゅうしてゐみたいだし、最近になつて魔界からアイといつ女までやつて來たのだ。

このアイといつ女も横島に対しラブラブモード全開でくつついてい る。

ネリネにアイの事を尋ねてみたらタマモのあまりの迫力に根負けしたのかネリネは隠し通さなければならぬ秘密まで話してしまったのだ。

横島ですり泣えている記憶と思つてゐる『あの出来事』 も…

その事はタマモにとってあまりにも口惜しい事だったが逆にその事は横島の逃げ場を塞ぐ事でもあったので良しとした。

「今日」
「逃がさないわよ」

「だから何度も言つてるようだな、お前がダメという訳じゃなく
ワイは口口じやないから今はまだ」

そこでタマモはニヤリと笑いながら止めの呪文を口にした。

「ねりね」

ビクウツ

横島は微妙な発音で悟った。この発音はひらがなだと。
それでも冷や汗をかきながら無駄な努力をするのが横島イズム。

「ね、ネリネ？ ネリネがどうかしたのか？」

「誤魔化そうとしても駄目よ、ネリネ本人に聞いたんだから。ねり
ねが良くて私が駄目といつ事は無いわよね」

「だ、だから、あれは…」

「無いわよね」

タマモは答えを聞く前にもう、横島のパジャマのボタンを外し始め
ている。

横島自身、ねりねとの事は子供の姿とはいえネリネに間違いは無かつたし、その想いを拒むことはネリネの存在 자체を拒む気がしたからこそその事だった。
だが、今のタマモにそれを言つてもただの言い訳にしかならなかつた。

「エーッ… タダオ」

タマモはゆっくりと顔を近づけ、横島もそれを拒もうとした。

「好きよ、タダオ」

「タマモ…」

横島から見ても今のタマモは綺麗だった、そして横島は諦めたかの様にゆっくりと皿をつむった。

(よし、墜ちた)

そして一つの層が重なった時、横島は堅い物が碎ける音を確かに聞いた。

ジャステイス崩壊

「いつただきまーす」

翌日、横島はリビングにてネリネ、アイ、楓に正座をさせられていた。

「忠夫さま！これは一体どういう事なんですか？」

(いや、貴女が喋らなければこんな事には。大体何でねりねの時の

事を覚えてるんですか？）

「忠夫くん。…男の子なんだから気持ちは解るけど、少しは歳の事を考えないと」

（貴女がそれを言いますか？… イエ、ナンテモアリマセン）

「タダくん。私、私ね……」

（楓さん。お願いですからその眼で刃物を握らないでください。マジお願いします）

ちなみに稟とプリムラは家を覆う異様な雰囲気から逃れる様にすでにこの場から逃げ出している。

そして、当のタマモ本人はと云うと、幸せそうな顔で横島のベッドの上で丸くなつていて、時折真っ赤な顔でクスクス笑っている。

その頃、ある世界で人狼の少女が泣きながら遠吠えをしていたとか
いなかつたとか……

とつあえず終わってみる。

G × S-なTICK!Tack!-3(後書き)

少し書き直しただけで、あまり変わりはなかったです。

#キャラクターハヤシの横島探察日記（前書き）

「」の話は本来G×S!で行方不明になつた横島を一柱が探し回ると言つ設定でしたが、よく考えると不謹慎だと言つ事で今回の書き直しでは本編より分離、TICK-TACK! 同様に番外編として投稿します。あえて書き直しさしていませんが、今後は「」の中から短編として書くかもしません。

キーちゃんといっちゃんの横島探偵団

キーちゃん『わて、横島さんの捜索を再開しましょうか』
サツちゃん『せやな。早く見つけんと』

二人『面白イベントを見逃してしまつーー。』

そして二人は捜索を始めた。

キーヤん『おつー横つちがおつたで』
サツちゃん『どれどれ』

音姫「弟君ーーーー何なのこの本はーーーー」

横島「堪忍やーーーーしうがないんや、男のロマンなんやーーーー！」

音姫「し、しかも胸が大きな本ばかり#」

横島「そ、それは……」

音姫は正座をさせた横島の前で唸つていた。

音姫「うひーーー、じつせお姉ちゃんは……」

その言いながら音姫は自分の胸に手をやつた。

由夢「あれ？こんな所にも隠してあるよ」

クローゼットを捜していた由夢は数冊の本を取り出した。

横島「なぬ？ 其処に隠した覚えは」

音姫「…由夢ちゃん、どんな本？」

由夢「こんな本だよ」

由夢から受け取った本を見て音姫は絶句した。

音姫「『可愛い妹』『妹と留守番』『妹と禁断の…』『お兄ちゃん大好き』」

タイトルを読み上げながら音姫はワナワナと震えていた。

横島「な、何じゃそれは――！ そんな本を買った覚えは無いぞ！」

由夢「兄さん、言訳は男らしくないですよ」（苦笑通り）

音姫「お、お、弟君……」

横島「違つたら――――ワイは無実や――――！」

音姫「どうしてお姉ちゃんモノがないの――――！」

参考作品・「D・C・?」

キーヤン『どうやら彼女の世界の横島さんのようですね
サツちゃん『そのようやな』

キーヤン『じゃあ次に行きますか』

サツちゃん『もひつ見て行きたいんやがな』

サツちゃん『この世界はどうやへ』
キーヤン『屈ましたね、さて今度は』

化粧を済ませ、ウイッグを付けると其処には絶世の美少女が居た。
このみ「た、大変であります隊長！タ、タダくんが綺麗すぎるであります／＼」

環「うふふ、可愛いわよタダ坊」

其処には「コスロツ衣装で女裝させられた横島が居た。

横島「も、もう勘弁してくれー、ワイが何をしたー！…」

どんなに泣き叫びとも横島を逃がす氣は環にはさう無い無かった。

環「あ、ああ……やーーん、タダ坊つてば何でこんなに可愛いこのみ「あーーータマお姉ちゃんズルイーこのみもーーー！」

一人に挟まれた横島は色々とたまつたものではない。

横島「こ、こらー！タマ姉もこのみもそんなにくつつかれると……ああ、柔らかいモンが腕に……」

そうじていると扉がいきなり開いた。

シルファ「これは一体何の騒ぎれすか！？」

部屋に怒鳴りこんだシルファが見たのは絡み合った三人、特に真ん中の横島であった。

シルファ「な、な、な？」

横島「シルファちゃん……こ、これはその……」

シルファ「ご、ご、ご主人様はお、女人らつたれすか……」

横島「違——う——！」

シルファ「騙されたれす——！」

シルファは叫びながら部屋から出て行つた。

横島「シルファちゃーーん！」

環「ねえ、タダ坊」

横島「なんだよ」

環「やつぱり……取っちゃおか？」

そう言いながら笑みを浮かべる環の手にはハサミが光っていた。

横島「い———や———！」

参考作品・「T.O Heart」

キーヤン『此処も違つよつですね
サツナヤン』ほな、次行こか』

キーヤン『今度はじりでしょいへ.
サツナヤン』おーねつたで』

あ!」「ん~~, サツナヤン!』

横島「む~~, ふはあつ~あ、あ!姉いいかげんに...」
りこ「こり忠夫、今度は私の番だ!」

横島「だ、だから...むふ!」

りこ「ちゅばちゅば、うむつ...れるれろ!」

あ!」「あ~~~~~舌入れた~~~~忠夫、私も~~~」

参考作品・「Kiss Kiss」

キーヤン『い、此処は色々と危険ですね
サッちゃん』次行こ、次!』

キーヤン『さて、今度は?』

サッちゃん『何か嫌な予感がするんやけど』

かなめ「つぐみ、しつかりと押さえていなさいよ
つぐみ「OK あただお、覚悟はいい?」
ただお「嫌だ――! 勘弁してくれ、ねーちやーん!..」

参考作品・「巨乳家族」

サッちゃん『次――――――』

キーヤん『今度は大丈夫でしょつか?』
サツちゃん『あ?どうやろ』

横島「いーやーじゃー…やめてくれーーーー!」

羽「こら、騒がないの」

横島「美神さーん、おキヌちゃーん、小竜姫さまーーーー!助けてーーーー!」

サツちゃん『おつ、当たりか!?』

鶯「大丈夫大丈夫。天 殿も通つた道なんだから」

横島「安心できるかーーーー!心眼、何とかせんかい!」

心眼『すまぬ横島。お前の体から離されは何とも出来ん』

テーブルの上に置かれた心眼は申し訳なさそうに呟いた。

羽「さあ、最後にその邪魔な一枚を」

横島「嫌ーーーー!」れだけはーーーー!」

参考作品・「天地無用!」

サツサチayan『心眼がおるしなんや触れてはいかん世界のよひやな
キーヤん』そうですね。では次に』

キーヤん『で、此処は?』
サツサチayan『どうやるな?』

横島「美神さんやおキヌちゃん達、元気にしてるかな?」

サツサチayan『お?』

アラストール『やはり帰りたいか?』

シャナ「ふん、帰りたければ帰ればいいじゃない」

横島「シャナ、俺が帰つたらやつぱり寂しいか?」

シャナ「バ、バッカじゃない!寂しい訳ないでしょ、せいせいする
わよ//」

心眼『安心せよ、このままお前達を見捨てて帰るよつまね』の
男はせぬ

サツちゃん『あちやー。またハズレや』

横島「そつこいつ事、心配するな」

横島はそう笑いながらシャナの頭を撫でた。

シャナ「な、なななななな／＼何してんのよアンタは／＼／＼

横島「照れない照れない」

シャナ「て、て、照れてなんて無いわよ／＼／＼

横島「真っ赤な顔をして言つても説得力無いぞ」

シャナ「うつ、うるさいつるさつるせーーーーーーーー！」

心眼『成長せぬ一人だな』

アラストール『まつたぐ』

参考作品・「灼眼のシャナ」

キーヤン『ザ—————』（グラニロー糖）
サツちゃん『ザ—————』（黒糖）

キーやん『ま、まだ口の中が甘いです
わいつやん』ワイもや。今度は『

なな「ご主人さまー。お散歩行こ」、お散歩」

横島「散歩？仕方ね な」

たまみ「えー。『ご主人さまはたまみとお昼寝するんだよ』
くるみ「違うのー。くるみとおやつを食べるのー。」

みか「おひがやまは黙つてなさい。『ご主人様はー、私とー、ラブラン
ブにー…』

あかね「みーかー姉 セーん」

みか「ひいつ！わかつた、わかつたわよ。だから狩猟本能よみがえ
らさないで」

横島「こらこら、みんな仲良くしりょ
るる「るるたちはみんな、なかよしうお
もも「です」

つばさ「ボクたちは』『ご主人様の守護天使なんだよ

みどり「みんな『ご主人様が大好きなのれす』

らん「この気持ちは何時までも変わることはありません」

あゆみ「そう。12人いても気持ちは一つ」

ゆき「ご主人様がご主人様であるかぎり」

12人『この身に代えてもお守りします！！』

横島「みんな、ありがとな」

参考作品・「天使のしつぽ」

サツちゃん『ええ話や』

キーヤん『でも此処も違つよつですね』

キーヤん『お願いします。今度こそ』

サツちゃん『ホンマええかげんにしてほしいわ』

ラル「タダたん急いで！“ノイズ”が逃げちゃつよー。」
忠緒「だつて、あの格好恥ずかしいよ」

ラル「そんなこと言つてる場合じゃないだろ。住宅街に入られたら
どんな被害が出るか」

忠緒「だつて／＼／＼／＼」

『オゴジヨの姿をした使い魔ラルは母親の妹「横島小百合」（叔母と呼ぶと命が碎かれる）から魔法少女の力を受け継いだ「横島忠緒」と共に世界の調和を乱そうとする存在“ノイズ”を倒す為に日夜闘い続けているのだ。』

忠緒「誰に説明してるんだよ」

ラル「お約束つてヤツだよタダたん」

忠緒「タダたんつて言つなーー！」

ラル「でも真面目な話、被害が出てからじや遅いよ

忠緒「わかつたよ」

ラル「それでこそタダたんだ。さあ、“意味在る言葉”を
忠緒「やればいいんだろ、やれば！」昼夜と夜とを紡ぐ朱あか』

そう唱えると忠緒の服は光になつて上の部分から徐々に消えていく。

ラル「うほーーー」

忠緒「こらーーー！見るなーーー！！／＼／＼／＼／＼」

ラル「そんな！タダたんは僕に死ねつて言つのかい？」

忠緒「死ね！－#」

ラル「駄目だよタダたん。男の娘がそんな乱暴な言葉を使っちゃ

忠緒「何時か絶対死なす！－！」

そういう言つてると忠緒の服は全部消えて今度は足の方から魔法少女のコスチュームに変わっていく。

白スクみみたいなボディースーツにメイド風味の入ったセーラー服、ミニスカートにハイソックスの絶対領域、長い黒髪は右側8と左側

2のアンバランスなツインテール（だが、それがいい）靴は膝まであるブーツ、魔法少女タダオキヨーの誕生である。

「ラル「今日の変身も堪能させていただきました」

忠緒「うへへへ／＼／＼

その顔は真っ赤に染まり、目尻には涙が浮かんでいた。

参考作品・「おと×まほ」

キーやん『ぐはあつ……』（鼻血）

サツちゃん『ぶはあつ……』（鼻血）

サツちゃん『乱ひやん』（鼻に栓をしてくる）
乱「何だ？」
キーやん『樂ひいれふか？』（回じく）
乱「すつ」へ「

終わるぞ

キーヤことサトウヤの横島探査日記一（後書き）

注・最後のネタで横島の名前が忠夫ではなく忠緒なのは男の娘という設定なのでそれらしく変えてみたわけです。

あくまでもネタなのできついシックノリは無しの方向でお願いしたいです。

#キャラごとキャラの横島探査日記2（前編）

前回同様にあくまでもネタとこいつ方向で。

キーヤんとサツちゃんの横島探査日記2

サツちゃん『さて、今回も頑張りまひょか』
キーヤん『そうですね、急ぎましょ』
サツちゃん『慌てず、急いで、正確にな』
キーヤん『何処の技師長ですか』

横島「銀ちゃん、『メン。遅くなつたな』

銀一「ホンマや。遅いで、横っち」

バッグを抱えながら横島は、走つて來た。

横島と銀一、二人は小学六年生でクラスメイトである。
今日は映画を見る約束をしていて少し、横島が遅れたらしい。

銀一「お、間にあつたな。横っち、早よせんと始まつてしまつで」
横島「分かつとるつて。えーと、小学生は……あつ、今日はレディ

ースティーか」

銀一「……ちょっと待て、横っち……まさか……」

横島「悪い銀ちゃん、ちょっと待つててな」

そう言い横島は駆けて行つた。

銀一「はあ……」

銀一は重いため息をついた。そして数分後。

横島「お待たせ……」

銀一「……やつぱりか……」

そこにいたのは、かつ今までの衣装に若干の変化を持たせ、長い黒髪のウイッグを付け、スカートを穿き、何処から見ても絶世の美少女になつた横島であつた。

『さやーー、何あの子? 可愛いーー』『モーテルかしら?』『お人形さんみたい』

横島「や、早く行」。銀ちゃん

横島はウキウキ顔で会計を済ます。

銀一「横っち、お前な」

横島「だつて、今日はレディースデーだもん」

そう、彼はその女顔を活かし、レディースデーなどは女装をしていたのだ。

参考作品・「少女少年?」

キーヤン』・・・・・

サツサヤン』・・・・・・・

サツちゃん『あとと、お次は…』
キーちゃん『どうでしょ?』

沙羅「忠夫！何時までもだらしない格好してないで着替えて来なさい。今日は久しぶりの衣頃者が来るからだからね!!!!」

横島「分かつたよ」

双樹「はい忠夫、着替えだよ」

俺は横島忠夫21歳、G.Sだ。ようやく美神さんから独立して今は自分の事務所を持っている。そんな俺の元に助手として押しかけて来たのが白鐘沙羅と白鐘双樹の双子の姉妹。俺なんかの何処がいいのか住み込みで俺の世話をしてくれている。

双叶「アリス、おおきな」。」

沙羅「あ～～！！双樹、何抜け駆けしてゐるのよ！～どきなさい、着

替えの手伝いは私がするから」

横島「お、おい、二人とも…」

一人とも着替えをさせる立場を取り合っているがこの狭い場所でも

み合ひつと…

沙羅「うわっ！」

双樹「きやつ！」

横島「どわっ！」

言わんこいつちやない。もみ合いになつて三人まとめて倒れ込んだ。
そして其処に。

秋月「お早う御座います！GS協会から参りました秋月と申します。
今日は文珠使いである横島先生には是非ともお受けしていただきたい
依頼が……はあつ……」

いきなりノックも無しにドアを開けて入つて来た秋月という男は俺
達を見て啞然としていた。それはそうだろう、絡み合つている今の
俺達を第三者の目から見たら……

秋月「こ、之は男一人、女一人による多人数プレイ！いわゆる『3
P』！－あ、ああ、何という事だ、何という事だ、重要な依頼を受
けてもらおうとした男がまさかこんな異常性癖の持ち主だったとは。
中学生相手に信じられん。俺なら断然巨乳の女、映画女優でいうな
ライ・ベル・ア・ヤーがいいのに。しかし、この男以外にあの靈
症を解決できないのもまたたしか。俺はあえて社会道徳をかなぐり
捨てて見て見ぬふりをしなければ……ゴクンッ」

（心象風景）《（あけてく、あけてよ）夜中、電話ボックスの中
で泣きながら開かないドアを叩く秋月少年》

沙羅と双樹は秋月がブツブツと独り言を言つている間に横島から離
れてその横に座っていた。

秋月「そう、之は『超法規的措置』俺は靈症事件の解決の為に不幸な二人の少女の人生をあえて、あえて見て見ぬふりをするのだ。ああ、最低だ最低だ。俺はなんて最低なＧＳ協会職員だ。故郷の母親よ、別れた女房よ、女房の実家に引き取られた愛しき愛娘よ、この秋月郁の魂の選択を笑わば笑え…………見なかつた事にしよう。（ワハハハハハハハハハハハハハハハハハツ）と、いう事で横島先

やつ今までの苦悩もなんのその、笑顔で話を続ける秋月。

沙羅「…大丈夫かエイツ？」

雙樹「え、と」

双樹「え、と……続き、する?」

横島 何のた！」

参考作品・「フタコイ・オルタナティブ」 「BPS」

キーヤン『そりですね』サツちゃん『向や、シッ ハリスルハリ満載やな』

サツちゃん』さて、お次は『
キーやん』期待は出来ませんね』

一刀「白蓮！」

白蓮「よお！北郷じゃないか」

愛紗「お久しぶりですね」

鈴々「久しぶりなのだ！！」

此處は反董卓連合が集まっている場所、一刀達はようやく連合に合流したのだ。

白蓮「どうだ、琢県の様子は？」

朱里「はい、今は糜竺さんと糜芳さんの姉妹に任せてあります」

白蓮「北郷達が留守を任せるとはかなりの腕前なのか？」

朱里「ええ、武の方もそれなりにありますし、政の方もそれなりに信頼できますし、まあ、それなりに大丈夫かと」

白蓮「…本当に信頼してゐるのか？」

其処に新たな軍勢がやって來た。

愛紗「今度は何処の軍でしょう？」

白蓮「旗印は…劉に横か。桃香と横島か」

一刀「劉だつて…！白蓮、もしかして劉備か？」

白蓮「ああ、知つてゐるのなら話は早いな。驚くなよ、あそこにも天の御遣いが居るんだぞ」

愛紗「そんな…ご主人様以外に御遣いが居る訳が…」

朱里「でも、たしかに管轄の占いには御使いは一人いるとの件が
鈴々「うにゃー。会つてみれば分かるのだ」
一刀「そ、そうだな…（まさか本当に劉備が居るとはな。もしかしてとんでもない事をしちまつたんじや）」

そして、桃色の髪をした女の娘とこの時代には無い筈のGジャンとGパンに赤いバンダナをした男、朱里によく似た格好をした紫色の髪の小柄な少女がやつて來た。

桃香「白蓮ちゃん〜ん！…元気だつた〜〜！？」

横島「久しぶりだな白蓮」

雛里「久しぶりでしゅ」

白蓮「お前達も元気そうだな」

朱里はその小柄な少女を見ると。

朱里「ひ、雛里ちゃん〜ん！」

雛里「え？…しゅ、朱里ちゃん〜ん！」

二人は泣きながら駆け寄り抱き合つた。

朱里「雛里ちや〜〜ん、会いたかつたよ〜〜」

雛里「ひ、酷いよ朱里ちゃん、黙つていなくなるんだもん〜〜」

白蓮「何だ、二人とも知り合いだつたのか」

桃香は一刀に近づいて話しかける。

桃香「貴方が琢県の県令様でもう一人の御使い様ですね。初めまして、私は名を劉備、字を玄徳と申します」

横島「俺は横島忠夫だ。よろしくな」

一刀「あ、ああ。俺は北郷一刀、よ、よろしく」

愛紗「私は関羽雲長。ご主人様一の忠臣だ」

鈴々「鈴々は張飛なのだ！！」

一刀は桃香を呆然とした表情で見つめていた。

一刀（この娘が劉備玄徳。愛紗と鈴々の本当の主だったかも知れない娘…）

すると其処に。

星「おやおや。北郷殿はさつそく桃香様に手をかけようとなさつておいでか？」

一刀「えつ、いや、そんな事は……せ、星…！」

星「久しづびりですな、北郷殿」

白蓮「なんだ、星。結局横島の所に行つたのか」

星「ええ。桃香様の理想に感銘を受けたし、何より主が面白_s…
げふんげふん、主は忠誠を誓うに相応しい人物でしたからな」

横島「今、本音が漏れていたぞ」

星「これは心外な。まさか我が忠誠が疑われようとは」

横島「はいはい」

そんな光景を見て一刀は

一刀（五虎將軍の一人の星が劉備の所にいるのか。なら少しあは安心かな）

そんな想いをはせていた。すると、

桃香「あ、あのー、北郷さん」

一刀「は、はい。何でしょ、う？」

桃香「さつき、星ちゃんが言つてた事なんんですけど……わ、私にはご主人様が居るのですみません……！」

桃香はそう叫び、横島の腕を掴んで頭を下げた。だが一刀は顔を青くして震えていた。何故ならば……

愛紗「ご主人様……」

一刀「は、はいっ！！」

愛紗「少しお話があります。此方へ……」

一刀「そ、そうだな。話をしような、話を……だから話には偃月刀はいらないよな？」

愛紗「いいから来て下さい」

一刀「……はい……」

横島「……大丈夫かアイツ？」

朱里「はわわっ！た、多分……」

雛里「あわわっ！ほ、本当に？」

その後、陣の隅々まで悲鳴が響いたとか……

サッちゃん『今回もやりたい放題やつたな』

終わります。

聖闘士星矢～最終聖戦の戦士達?～（前書き）

……黙して語らひす。

書いた事を反省はしてるが後悔はしていない。

聖闘士星矢／最終聖戦の戦士達？

此処はギリシャ聖域のアテナ神殿。

首を落とされたアテナ像の前で今世のアテナ、木戸沙織は泣き崩れていた。

『久しぶりだなアテナよ』

其処に現れたのは黄金聖闘士をいとも簡単に倒した聖魔天使と名のる四人の男達。そして……

「……貴方は……ルシファー……！」

「何だつて！！氷河、ルシファーと言えば」

「ああ、かつては神に仕える大天使でありながら神以上の存在になろうとして魔界に墮とされた墮天使ルシファー、またの名を悪魔王サタン」

星矢、氷河、瞬はルシファー達に対して構えを取るが聖魔天使達は相手にする価値もないという様に一瞥しただけだった。

「貴方の目的は何なのですか、ルシファー」「

「当然この地上とアテナ、貴女の命だ」

「そんな事はさせるかっ！－くらえ、ペガサス流星け……」

「この、無礼者……」

ルシファーに攻撃を仕掛ける星矢達だが聖魔天使達に一瞬のうちに倒されてしまう。

「星矢！氷河……瞬」

沙織は倒れた星矢に駆け寄る。

「愚か者めが。俺達が何の苦もなく倒した黄金聖闘士、それより劣る最下級の青銅の貴様達に一体何が出来るというのだ」「ぐ、ぐわうっ…！」

ルシファーアはそんな星矢達を一瞥すると沙織に語りかける。

「アテナよ、これで分かつただろ。もはやこの地上に貴女を守る聖闘士は居ない、無駄なあがきはせずに大人しく我が軍門に降るがいい」

「何を…俺達はまだ戦えるぜ」

「そうとも！」

「アテナを、この地上を守る為に僕達が諦める訳にはいかない…！」

そう言いながら星矢達は小宇宙を高めながら立ちあがる。

「フッ、ならば今にも消えそうなその命の灯、今度こそ跡形もなく消し飛ばしてくれる…！」

「止めなさい、星矢！氷河！瞬！その体では…」

星矢達と聖魔天使達がぶつかり合つたの瞬間。辺りを強大な小宇宙があおつた。

「な、何だこの強大な小宇宙は…？」
「邪悪な感じはしないけど」

「ルシファー様、『J』の小宇宙は一体？」

「Jの小宇宙……それが…」

そして、其処に小宇宙の主が現れた。

『Jさん所で何をしてるんですか？…やつらがん

『向、せひぱぱつキーせんやなにけ…』

その瞬間、辺り一帯の時間は凍りついた。

『横島さんの居場所が幾つか特定できました。さあ、行きますよ』
『わうか、今度こそ見つかるとええな。あ、ちょっと待ってや』
ルシ……もとこ、サツちゃんは沙織達の所に来ると話しかける。

『アテちゃん、つー訳で用事が出来たから今回の聖戦は此処でお開きにさせてもらひついで。ハーリちゃんにもあんじょいよひじゅうひといふところへ。ほなさいな』

そう言い残し、サツちゃんはキーちゃんと共に向所かへと消えて行った。

後に残されたのは事情をまったく理解できずに呆然とする沙織と星矢達、そしてあまりの出来事に石化している聖魔天使達だけだった

.....

と、言ひ訳で横島探索日記3に続く。

聖闘士星矢～最終聖戦の戦士達?～（後書き）

……と言つ訳だ。

キーゼンヒサヒヤの横島探索日記3（前編）

で、いっしが本命。

キー ゼンとサルサの横島探索日記③

注・一応聖闘士聖矢～最終聖戦の戦士達?～の続きとなつております。

『まったく、何をしてたんですか貴方は』
『しゃーないやんけ、この所更新が無くて暇やつたんや』
『とにかく、今回はこの世界からです』

パシヤツパシヤツパシヤツ

「一人の少女?は幾つものフラッシュの中に居た。」

カメラマンA「NATUKOちゃん、もうちょっと撮ってくれるかな?」

夏子「え?...え、と.....」

忠夫「夏子ばっかやなくてウチもひょんと撮つてなー」

パシヤツパシヤツパシヤツ

ワイ、横島忠夫は小学6年生でれっきとした男の子や。「娘」やない、「子」やで!

夏子、彼女はワイのクラスメイトで今をときめくアイドル、ひょんな妹や。

そのワイらが何でこの状況に居るかとこいつやな、これこほ深い訳があるねん。

実は夏子の父ちゃんが夏子をアイドル「デビュー」させようとしたんやけど夏子はそれを嫌がったんや、何度も抗議しても聞いてはもらえんかったらしい。

そこでワイは考えたんや、「ワイと一人でデュオとしてデビューして人気が最高潮に達した時にワイが男やつちゅー事をばらして全てを台無しにしようつちゅー作戦や。何?女と男のデュオでそんなに人気が出るのかやと。

……言いたくないけどな、ワイは少し女顔やねん。カツラがぶつてスカート穿いたらもう何処から見ても女にしか見えんらしい。何や、笑いたければ笑えや!!

パシャッパシャッパシャッ

カメラマンB「TADAちゃん、そんな難しい顔しないで笑つて笑つて」

忠夫「えつ?あ、はい。綺麗に撮つてな」ニコリッ

夏子「アホ……あんがとな、横島……」

小さな声でそう呟く夏子の頬は赤く染まっていた。

カメラマンA「じゃあ、最後に一人で決めポーズを」

二人「はい」

夏子「NATUKOと」

忠夫「TADAOで」

二人は腕を組んで決めポーズを決める。

『二人はn a · d a · · ·』

翌日、アイドルデビューの記事が載った新聞を見ながらクラスは湧いていた。

銀一「わはははははははっー！」、己のTADAOって間違いなく横っちゃん」

男子A「知らん奴が見たら何処から見ても美少女や」

横島「……そーや、ワイや。悪かつたな」

女子A「悔しい～。ウチらよか横島の方がずっと綺麗やないか」

女子B「自信無くすわ～」

横島「ええな！絶対にばらすんやないぞ！」

銀一「当然や！こないなおもろい事邪魔できるかい」

女子C「でもこれで夏子と横島は急接近やな」

夏子「えつ？そ、そんな事は…無いやろ…」

女子D「何ゆーてんねん！明らかに夏子の為やないか！」

女子C「あ～あ、結局横島をゲットしたのは夏子か」

サツちゃん『またコレかい』

キーヤン『全巻そろえてるからこですかからじまぐれ続もやつですね』

参考作品「少女少年？」

キーヤン『さて、此処はどうでしょ？』
サツちゃん『なんや、けつたいな所やな』

レポーター「さあ、あの世一武道会もいよいよ決勝戦！最後の戦いになりました。まずは赤コーナー、北銀河の地球出身、孫悟空選手！対する青コーナーは西銀河の地球出身、横島忠夫選手です！」

ワアアアアアアアアア――――ツ――――

北の界王「悟空――――がんばるんじゃ――――忠夫なんぞりやつ
ちやつとやつつけ大界王様に稽古を付けてもらひんじゃ――――」
西の界王「何をぬかす――優勝して大界王様に稽古を付けてもらひ
のは忠夫じゃ――――」

北の界王「宇宙最強の超サイヤ人の悟空に勝てるとでも思つとるの
か――」

西の界王「ふんつ――超サイヤ人がなんぼのもんじゃ――忠夫には
簡易DBとでも言つべき文珠があるんじゃ。まあ忠夫、悟空なんか
ケチヨンケチヨンにしてやりなさい――」

バイクハン「忠夫――貴様は俺に勝つたんだからな、負ける事は
許さんぞ――」

そんな声援？が飛び交う中、武舞台の上では悟空と忠夫が向かい合

つていた。

悟空「忠夫、やつとおめえと闘えるな。一度おめえと本氣で闘いた
かつたんだ。オラ、ワクワクすっそ！！」

忠夫「ワイは全然ワクワクせんわ――いつ――こんな事やつたら序
盤でさつさと負けとくんやつた――――！」

忠夫は涙を流しながら泣き散らすがもはや後の祭りであった。

大界王「じゃあ悟空ちやんに忠夫ちやん。お互に頑張って頂戴」
そして、試合開始の合図が鳴る。

悟空「まずはオラから行くぞ！か、め、は、め、波――！」

悟空の手から放たれたかめはめ波は一直線に忠夫に向かうが、

忠夫「どわ――！サ、サイキック・シールド――！」

大界王星での修行で強化されたサイキック・ソーサーは全身を隠す
ほどの大さになり、なおかつかめはめ波の直撃を受けてもビクともしなかった。

忠夫「い、いきなり何すんじゃ――いつ、死ぬかと思つたやないか
――――！」

悟空「さすがだな、忠夫。じゃあ、本気で行くぞ――はあ――
――！」

悟空の全身から噴き出したオーラは金色に輝きだした。髪も逆立ち、
筋肉も膨れ上がりその体は一回り大きくなる。目つきは鋭くなり、

黒田も緑色になる。そして黒髪も金色になり悟空は超サイヤ人への変身を遂げる。

悟空「さあ、始めるぞ忠夫！…！」

忠夫「始めんでいいわーーいつーー！」

その瞬間、悟空の体は消えた。いや、あまりの超スピードの為消えたように見えるのだ。

忠夫「やられてたまるかー！…文珠ーーーーー！」

忠夫は文珠を三つ取り出し【超】【加】【速】と込める。

韋駄天の技であるこの加速は、周りの時間を遅くさせる事によって超スピードを得るのである。だが……

悟空「おっ？忠夫、おめえも結構早く動けるんだな」

忠夫「何で遅くなつた時間の中でも普通に動いとるんじゃ おのれはーーーー！」

元から超スピードで動く悟空にはあまり関係がなかつたらしく。

キーヤン『此処の横島さんもどうやら違つようですね
サッカーヤン』そのようやな、じゃあ他の場所に行くか

キーヤン『ちよつと待つて下さご。あの観客席に居るのほこの世界
の私達みたいですよ
サッカーヤン』なんやつて？』

観客席の中では……

キーヤん『横島さん、頑張ってください……』
サッちやん『横っち、負けるんやないで。ワイらは横っちが勝つ方
に賭どるんやからな……』

その声を聞いた横島は、文珠を取り出し発動させ、悟空を【模】倣した。

悟空「なつ！？オラになるなんてすつけえぞ、忠夫！！」
忠夫「はあああああ――――――！」

横島はすぐさま超サイヤ人になると気を高め出した。

忠夫一がめはめ波

忠夫が撃ち出したかめはめ波は一直線に悟空の横をすり抜けて、観客席の一柱に飛んでいく。

二柱 あれ?

ドゴオオオ――ンツ――!

二柱 ギヤアアアア――――――――――――

レポーター「おーーと、悟空選手がかわしたかめはめ波の流れ弾に不幸な観客が巻き込まれてしまいました。皆さまも“うか”注意ください」

キーやん』……あれは狙いが外れたんじゃなくさつちつとの世界の私達に狙いを定めてましたね……』

の私達に狙いを定めてましたね……』

サツちゃん『その様やな……あれ？……なあ、キーヤん』

キーヤン『何ですか?』

サチちゃん『あの横つか、じつを見とるみたいなんやけど……』

横島「はああああ――――――――――！」

横島はさらに気を高め、超サイヤ人3への変身を遂げる。

悟空「なつ！？おめえ、超サイヤ人3にもなれるんか！！」

そして横島は上空に向かつて全力のかめはめ波を撃つ。

キーヤン『来ますねえ』
サツサヤン『ああ、エネルギー波がこいつに来るなあ』

ドゴオオオオオオオ——ンツ！

一柱『ギャアアアアア――――――――!』

サツちゃん『え、えらい目にあつたわ
キーヤン『魂の牢獄がなかつたら消滅してましたね

参考作品「ドリームボール」

キーヤン『それでは、次は……』
サツちゃん『当たり、出してくれや』

その世界は暗雲に囲まれ雷鳴が轟いていた。

三つの塔で出来ているクリスタルの城の中で横島と二人の少女は向かい合って話をしていた。

その内の赤い髪で長いお下げをしている少女は横島に泣きながら抱きついた。

横島「光……」

横島は抱きついて来た少女、光を優しく抱き止めその頭を撫でる。

光「そ、そんな……そんなの酷いよ、こんなのはつてないよ——っ

！……何で、何で忠夫が柱なんだよ、私は嫌だよ——！」

海「そうよ、何で横島さんが柱なんかにならなきゃいけないのよー！

風「私も納得できませんわ、何で横島さんばかりがこの様な田に……」

横島「海、風……」

胸の中で泣きじゃくる光の頭を撫でながら横島は語りかける。

横島「心配するな、何とかなる……」

風「何とかなるって……どうするつもりなんですか？」

横島「忘れたのか、俺は不可能を可能にする男！ワイルドジョーカーなんだぞ。セフィーロの一つや二つ、柱なんかにならずに救つてやるわ。そして……」

泣きながら見上げて来る光に優しく微笑むと話しかける。

横島「光達と一緒に地球に帰るって約束したしな」

光「うんっ！約束したよね。忠夫は約束した事はきちんと守つてくれるもん」

よつやく笑顔になつた光は横島の胸にじやれつく様に頬を擦りつける。

海「そうよね、横島さんなら何とかしてくれるわよね」

風「ええ、その為にもまずは『ボネアを倒さなくては』

海と風の瞳からも涙は消え、輝きが戻つて来た。

横島「それに……」

光「それに、何？忠夫」

横島の咳きに光は小首を傾げる。

横島「地球には美神さんやおキヌちゃん、冥子ちゃんに魔鏡さん。小竜姫さま、ヒミさん、ワルキューレ、小鳩ちゃん達が待ってるん

じゃ――――帰らざるにいられるか――――！」

だああああああ――――――――――――

それまでのシリアルスを吹き飛ばす横島のセリフを聞いた海と風、そして立ち聞きしていたクレフ達も全員ずつこけていた。

海「よ、横島さん、あなたね——!」

「風「ま、まあ、これで」」横島わんと呟つぐめなのでしょ、つが……」

クレフ（まつたく、あの男は）

フリオ（ほむほむ、まあい）風の音の通りおりあれでこそ横島を俺達は横島と光達、マジックナイトを信じるまで

そんな中、光は……

光「ひ」

涙目で頬を膨らませた顔を真っ赤にしていた。

横島「お、おい……光？」

嫌な予感がした横島が光から離れようとしたが、

光「忠夫のバカ—————！」

光が一瞬早く横島の足を思いつきり踏みつけていた。

横島「いでえ――――――――！」

海「あはははは、罰が当たったわね横島さん」

風「浮気はいけませんわよ」

モコナ「ふうふう」

横島「浮気つて何や――――――！」

キーヤん『神魔人の証である封印具もないでしこの横島さんも違
うよ』
サツサツayan『でも、此処の横つちにも頑張つてほしいな』

キーヤん『ですね』

参考作品「魔法騎士レイアース」（アニメ版）

キーヤん『わて、此処はどひでじょひへ。』

サツサツayan『なこやこの世界は色々と混ざつ合つてこなせりかのこな

モビイ「おい忠夫、そろそろ行へだ」

横島「分かった分かった」

モビイ「ヤクト、貴様も急げよ

ヤクト「うるせえな、言われなくても分かつてるよ

「なせりかのこなせりかのこなせりかのこなせりかのこなせりかのこな

此處は神天界、魔界、幻想界、未来界、精神界、そして人間界が一つになつた融合世界フュージョニア、そこにある乙女学院である。彼ら三人は特別留学生として本来女子高であるこの乙女学院に通つてゐるのだ。

モビィ「とにかく急ぐぞ、学園祭まであまり時間は無いんだ。早く出し物などを決めないと」

横島「今日はヤクトの家でいいんだな」

ヤクト「ああ、親父はモビィの家に行くと言つてたからな。あの二人がいる家じや落ち着いて話なんか出来ん!!--」

モビィ「忌々しいがその意見には賛成だ」

ヤクト「歩いて帰るのもめんどくせえな。飛んで行くぞ」

そう言いヤクトは翼を広げて飛び去つて行く。

モビィ「待たんかヤクト!…全く落ち着きのない奴だ。忠夫、私達も行くぞ」

モビィも白い翼を広げて飛び去つて行く。

横島「気は進まないんだが……仕方ねえな」

横島はそう言いながら内なる魔力を解放する。するとその姿は女性の物となり、瞳は蒼色に染まり背中には薄緑色の一対の翼が現れ、同じように空へと飛んで行く。

ヤクト・ヤン・キー、彼は魔界の魔太子である。

その名の通りにヤンキー・ファッシュョンに身を包み、背中には魔族の黒い翼を持つている。

モビィ・モ・ラール、彼は神天界の天太子である。白を基調にした服に身を包み、その手には風紀委員の象徴として光の竹刀を持っている。

当然背中には白い翼があった。

横島忠夫、彼は純粹な人族だつたが世界融合の際、神天界の波動と魔界の波動の影響を受けて神魔人とでも呼ぶ存在になつた。普段は普通の人間と変わりはないが魔力を解放するとまるで女神の様な姿になる。何故女性体になるのかは分からぬままだが。

(実はこれもノストラダマスの仕業である。理由は面白そつだから)

ヤクトの家に着き、玄関に入ると。

綾女「遅かつたでござるな、待ちくたびれたでござるよ」

モビィ「うわあっ！」

ヤクト「あ、綾女。てめえ、何時の間に俺んちに入り込んでやがった！？」

綾女「勿論、何時の間にやらでござるよ」

天井から逆さまにぶら下がっているのは川端綾女。横島のクラスメイトで人族の忍者オタクの少女である。

横島「まあ、いつもの事だ。気にするだけ無駄というものだ」

綾女「忠夫殿、するーとは少し寂しいでござるよ」

綾女の呴きを無視して部屋の中に入る其処には。

ラビア「あ、お帰り。遅かつたね」

コユキ「お帰りなさいませ。お茶の準備をしますよ」

ジョゼ「こら、忠夫！！あたしの馬のくせに、主人様を置いて帰るとは何事よ！！」

横島「……やつぱりお前達も居たのか」

ラビア、亜人間で兎人の女の子。運動神経は抜群で走るのが大好き。人参を食べると運動能力は跳ね上がるが兎の姿になつてしまふのが困りもの。

コユキ、魔族で雪女の女の子。だが実は雪女と人間のハーフ。その為か雪女でありながら寒さにはめっぽう弱く、自分が起こした吹雪で自分が凍えるという愉快な現象を起こす。

ジョゼ、種族はSFで人形の女の子。小柄で普段は横島の頭に乗つたり胸ポケットに入つたりして横島を馬扱いしている。

ルーシー「私達に隠れて何か悪巧みでもしてるんじゃないの？」

アキ「ヤツくん……私をのけものにするなんて。やつぱり私なんか死んだ方がいいんだ」

ルーシー「こ、こら、アキ！フグ鯨の毒なんて何処から持ち出して来たのよ！！ヤクト、アンタのせいよ、何とかしなさい！！」

ヤクト「何で俺のせいなんだ」

ルーシー、魔族の女の子だが、実は元神族。ある事件がきっかけで墮天してしまった過去がある。

アキ、神族の女の子。大天使であるが過去での事件のトラウマでその羽は小さく空を飛ぶ事も出来ない。ちょっとした事でもすぐに悪い方にとらえ、自殺しようとする悪い癖がある。

モビィ「学園祭の話し合いをしようとしただけだ。悪巧みなびして
いない」

ラビア「だったら何でボク達にも相談してくれないの？」

ジョゼ「水臭いのよ」

アキ「相談もしてくれないなんて…やっぱり私が悪いのね。死んで
お詫びするしか」

ルーシー「だから止めなさいって言つてるでしょーが…！」

そんな騒ぎの中、隣の部屋から何やら話し声が聞こえて来た。

魔王「天帝殿、余は貴女を愛しますぞ」

天帝「嬉しいですわ魔王様。勿論わたくしも魔王様を愛しています」

ヤクト「おー、モビィ…」

モビィ「……ま、まさか…」

ヤクトとモビィの二人は幽鬼の様に立ちあがるとゆくつと隣の部
屋への襖を開く。

魔王「天帝殿…！」

天帝「魔王様…！」

ヒシツ

其処には抱き合うバカップルが居た。

モビィの母親で神界の王、天帝とヤクトの父親で魔界の王である魔王の一人だった。

横島達はそんな二人を優しい目で眺めていたがモビィとヤクトにはそんな目が痛すぎた。

モビィ「母上え————！」

ヤクト「親父い————！」

天帝「あら、モツくん。お帰りなさい」

魔王「おお、ヤクトよ。帰つていたか」

『何をやつてるんじや————！（ですか————！）』

魔王「何をも何も、愛を確かめ合つていいだけじゃないか

天帝「そうよ、愛を育みあつてるだけよ

砂糖を吐きそうなアツアツぶりだが、此処に居る連中にはすでに体性が出来上がつている。

モビィ「全く、天帝ともあるうお方が……嘆かわしい」

ヤクト「親父のあの威厳は何処に逝つちまつたんだ」

横島「二人共……いい加減に諦めたらどうだ？」

横島のそんな助言も一人の心には届かなかつた。

魔王「天帝殿、今日の貴女は何時にも増して美しい」

天帝「魔王様、そんな貴方も昨日より今日、そして明日の貴方はずつと凜々しくなつて行くのでしょうかね」

魔王「天帝殿！！」

天帝「魔王様！！」

ヒシツ

神界の王と魔界の王

もはや一人は何処に出しても恥ずかしい最強のバカップルであつた。

תְּהִלָּה תְּהִלָּה תְּהִלָּה תְּהִלָּה תְּהִלָּה

キーヤん『田が、田があ――――――』
サつちやん『見るんやなかつたあ――――――』

ପରିପରାପରାପରାପରାପରାପରାପରାପରା

あまりの事に一柱は転げ回つて苦しんでいた。

ପ୍ରକାଶନ କମିଶନ

作者は作者で笑いながら転げまわっていた。

サツヒヤン『な、何ひゅー世界を考えるんやおのれはーー』

キーやん『私達を殺す気ですか！』

乱「ふつ、甘いな。まだ続きがあるぞ」

サッちゃん『何でー!?

天帝「ねえ、モツくんにヤツくん」

モビイ「何ですか母上……」

ヤクトー何だよ、天帝のおばさん」

天帝は自分のお腹を愛おしそうに撫でながら一人に聞く。

天帝「……弟と妹、どっちがいい？」

ପରାମର୍ଶପରାମର୍ଶପରାମର୍ଶପରାମର୍ଶପରାମର୍ଶ

『ローラーローラーローラーローラーローラーローラーローラー』

サツちゃん』お、鬼かいつおどれなつーー。』

参考作品「ハイスクール・オブ・ブリッジ」

終わりました。

横島と狐と茜雲（前書き）

少し思う所があつて Zinger Talker から引っ越ししてきました。

あまつたいた書き足しあしてないですけどね。

横島と狐と茜雲

人間なんかキレイだ。

自分達の都合だけで山を荒らす。

私達の住処を奪う。

私の……

私の母さんを……

母さんを殺した。

人間なんかキレイだ……

「仕事つスか」

「ええ、簡単な除霊だからあんた一人でも大丈夫でしょ」

横島は美神から渡された書類に目を通してい。

地方からの依頼で森の中で怪異が起こるという物だった。

「拙者も先生と一緒に行きたいでござるよ」

「あなたは私の仕事の荷物持ちよ
「そんなん、ひどいじでござる…」

頃垂れて涙ぐむシロを尻目にタマモは笑顔で横島の方に歩いて行く。

「頑張つて来てねシロ。じゃあ私がヨコシマと…」

「あんたもこっちはよ!! 私達は私達で厄介な仕事があるだからね。
勿論、おキヌちゃんもよ

「は～～い…」

「ちつ…」

美神が横島に任せた仕事は本来なら受けもしない様な低額なのが
美神は以前から母親の美智恵に横島の時給を上げると説教をされて
いた。

なのでこの様な低額の仕事をさせて給料ヒロの代わりにこじよつとう
う訳だ。

まあ、結局はピンハネをする事はするのだが…

そして美神達は自分たちの仕事場に、横島も自分の仕事場である山
の中の小さな村へと行くのであった。

「横島と狐と茜雲」

「幻覚に惑わされる？」

「へえ、山の中に山菜や薬草などを採りに入つても色々な幻覚で道に迷つてしまつて… 酷い時など崖から落ちそつになつた事もありやす」

横島は依頼主の村人達から今回の怪異の事を聞いていた。それによると数カ月前から森の中に入ると様々な幻覚が起こり、道に迷わされた揚句に元の場所に戻されてしまうとの事だ。

普通の村人たちはそれだけで済むのだが妖怪の仕業だと銃を持つて森に入る猟友会の人間や密漁者達などは先ほど説明された様に崖に誘い出したりなどと命に関わる様な出来事が頻発し、そこで最後の手段としてGSへの依頼となつた訳だ。

「うーん、事情から察するに妖怪化した動物か動物霊の仕業みたいですね」

「何とかなりやすでしょつか？」

「とりあえずこれから森の中に入つて調べてみます」

「大丈夫ですか？」

「まあ、これでもGSのはしぐれですからね。任せておいて下さい」

森の中に入った途端に村人達が言つていた様に幻覚に襲われ「見鬼くん」で辺りを捜してみるが強い靈波によつて「見鬼くん」は狂わされ人形の部分はグルグル回るだけで役には立たなかつた。

仕方なしに文珠に【捜】と込めて発動させて靈波の出所を捜す事にした。

どうやらあちらこちらに動きまわっている様で中々居所を特定できないが、その事は同時に俺の考えた通りだつた事がはつきりした。

「幻術を使うつて事は妖狐か妖狸といった所だな。銃を持った人間に殺意を持っている所から家族を殺されてその恨みから妖怪化したつて所か……。まったく、此処は禁漁区だつていうのに」

横島はこんな時にはその考え方は大抵、あやかし妖寄りになる。それはかつての猫又の親子、ミイとケイ、そして最近ではタマモとの事からも明らかである。

食べる為に動物を殺す、その事自体には何の疑問も持たないし割り切つても居る。

だが、楽しむ為の狩り、娯楽の為に動物を殺すといつ事にはどうしても納得はいかない。

そういうしている内に相手の動きが止まつた、其処に妖怪を縛り付けている何かがある様だ。

「グウウウウウウウ～～～～

叢の中から唸り声が聞こえる、草をかき分けて中を覗くと其処には殺されてから数ヶ月たつていて所々白骨化し、腐臭を放っている狐

の死骸があり、その前にはその死骸を守る様に子狐が牙を剥きながら俺を睨みつけていた。

思つた通り、銃で殺されたらしく頭には弾痕があつた。死骸がそのままといつ事はおそらく他の動物を狙つた流れ弾にでも当たつただろう。

「くそつ！！何でこんな事を」

「ガアアアツ！..！」

「痛てつ！..！」

せめて墓に埋めて供養してやろうと手を伸ばすが、子狐は叫びながら飛びかかつて来て俺の腕に噛み付き、鋭い爪で傷つけて行く。

子狐視点(→)

「ガウウウウツ！..！ガウ？..！」

「ゴメン、ゴメンな

子狐はこれだけ暴れまわり傷つけられるとそのままの横島を見つめるとその頬に涙が流れているのに気が付いた。そして不思議に思った、『何故この男は謝っているのか』と。

「こんな風に大事な家族を殺されて悔しいだろつな」

そう言いながら男は不思議な力を放つ珠を取り出すと母さんの体に当てる。

何をする気だと再び襲いかかるつとするがその珠は突然光り出し母さんの体を包む。

すると、さつきまでその体から流れ出ていた鼻が曲がりそうな臭いが嘘の様に消え去つて行つた。

この時横島が使つたのは【浄】の文珠、これにより死骸の腐敗は止まり、腐臭も浄化され消え去つたのだ。

妖怪化し、憎しみに囚われていたとはいえ知恵を付けていた子狐は横島が母親の体に害を及ぼすのではなく弔ってくれるのだと気付き、横島から離れる。

「分かつてくれたのか、ありがとな
「キューーン」

横島は噛みついていた口を離し、少し離れて座つた子狐の頭を軽く撫でてやると穴を掘り、母狐の死骸を穴の中に横たえ埋め戻し、粗末ながらも墓を作つてやると再び【浄】の文珠で辺りを浄化する。

子狐はその墓に手を合わせて黙祷していた横島に近づくと傷だらけの腕や頬を舐め始めると妖狐になつた事でタマモやシロ同様にヒーリングの効果がある様でたちまち傷は癒えて行つた。

「ク～～ン」

舐め終わると子狐は甘える様に横島に頬を擦り寄せる、どうやらす

つかり懷いてしまつた様だ。

「さてと、お前をじつするかだが……、連れて帰つたら美神さんは怒るやうな~」

「「ン？……！ キュ～～ン、キュ～～ン」

おいて行くの？嫌だ、嫌だっ！！ もう一人ぼっちは嫌だ！！ もう悪い事はしないから連れて行つてよ！！

その言葉から此処において行かれると思つたのか子狐は横島にしがみ付き、離れようとしなかつた。

「もつ人を襲う心配は無いだらうけど」のまま此処において行くと他のGJに退治されそうだしな。……仕方ない、一緒に来るか？」

「――――ンッ」

横島が一緒に来るかと誘つと子狐は大喜びで飛びつき、横島はやれやれといった感じで子狐を抱き抱えると依頼主の村長の家へと歩いて行く。

「で、その子狐が怪異の原因だと」

「はい。密漁者に母親を殺された憎しみから妖怪化し、山に入つて来る人間から母狐の体を護る為に幻覚で道に迷わせていました」「何故そいつを退治しないんだ！？」

散々幻覚に翻弄されたらしい村人は妖狐を退治せずに連れて来た事に腹を立てて『うらしく』怒鳴りながら聞く。

「もう反省して大人しくなつてますし、もし此処で退治したりしたら更なる怨念で祟り神になつてしまふ虞がありますから」

祟り神になる。そう言われた村長は顔を青ざめて慌てふためく。

「た、祟り神！？ それは困りますだ」

「安心して下さい。こいつは俺が責任を持つて保護妖怪として面倒を見ますから」

「この山において行く訛じやねえんですな？」

「はい、俺が連れて帰ります。ほら、散々迷惑かけたんだからな。お前も謝るんだ」

「キュウ～～、コン」

横島に言われ素直に謝る子狐を見ると村人達も何も言えなくなつた。幸いに死傷者も無く、怪異も無くなるという事で良しとする事にした様だ。

その後、依頼料を受け取り東京に戻る為に横島は山道を歩きながら下っていた。

子狐は横島の頭に乗っかり、甘えるようにじやれ付いている。

そんな彼らの頭上には空一面に夕焼けが広がっていて、ふと横島が氣付くと子狐もまた見惚れる様に夕焼けの空を見上げていた。

「お前も夕焼けが好きなのか？」

「ンンンン」

「やつか」

そんな空を見上げ、流れていく茜雲を眺めていると横島は何かを思い付いた。

「茜雲……茜……あかね……やつだ！アカネなんてどうだ？」

「ンン～」

「お前の名前だよ。今日からお前の名前はアカネだ」

「ンハ……ン――ンッ」

子狐もかなり氣に入つたらしく頭から肩に降りると顔に抱きついてその頬をペロペロと舐めてくる。

「後は……美神さん、給料上げてくれないだろーな……」

そして翌日……

「横島クン……？」

「どうしたんです、その子狐は？」

「これは一体どういう事よアラシマ、この浮氣者……！」
「女狐が…女狐が増えたで！」

仕事を終え、事務所に帰つて来た美神達が見たのはバツの悪そうな顔で笑つている横島と彼の膝の上でお揚げを食べているアカネであった。

「つまり、妖怪化したその狐を助ける為に保護妖怪として連れ帰つたって訳ね」

「はい。その辺の処理は昨日帰つてから隊長に頼んで済ませてるつス

「タマモちゃんの時といい、横島さんいらっしゃいですね」

美神はみづやく事情を理解し、おキヌは改めて横島の優しさを再確認していった。

タマモヒシリコはと咲ひついで……

「う~~~~~！」

「がるるるる~~~~~！」

「グウウウウウ~~~~~！」

横島の膝に抱かれているアカネと睨み合っていた。

「う～～～、ねえヨコシマ。私のお揚げは～？」

「悪い、タマモの分も買ってたんだが全部食われちまつた」

そんなふうに三つ返しを繰り返すと、私はお湯に浸かりながら、

タマモがアカネに飛びかかるうとしたその瞬間、アカネの体から凄まじいほどの靈波が放たれ、そして。

「なつ！？」

卷之三

卷之三

「そ、そんな…アンタ…」

そり言えは、一応奴隸たるだんだよなお前

横島の膝の上には人間形態に変化したアカネが居た。
セーラー服を基調としたワンピースを身に付け、その長い金髪はボ
ニー・テールと言うか、フォクシーテールに纏められていた。

改めて初めまして、私の名前はアカネ

「アガネ…サヤんですか?」

「 そ う よ 、 こ そ は お 主 しゆ 様 さま が 付 つけ て く れ た の う で す 」 い い 名 前 で し ょ

「なつ！－、お、お前何ちゅー呼び方を…」

「えー？ だつて私は保護妖怪なんでしょ？ だつたら私を保護する貴

方は私の「ご主人様じゃない」

「理屈はそうだろうけど、さすがにご主人様はヤバいと言つか何と言つか」

アカネは上田遣いで見上げながら横島の胸にのの字を書きながら迫り、横島は慌てふためきながらも何とか撤回させようとすると。何しろ見た田中学生のアカネに「ご主人様と呼ばれるのはありやる意味で危険すぎる。

「よ、横島クン、アンタ…」

「横島さん…」

「嫌ア――――――つ―――。そんな田で見んといて――――つ――
ワイは口つやない――――――つ―――。」

「拙者は認めぬで!」ぞわるつ――― やり直しを要求するで!」ぞわる――

「田口シマに助けられたのは私も同じよ、だつたら私も田口シマを
ご、ご、ご主人様つて…／＼」

「これ以上状況をやらこしくするな――――つ―――。」

「この馬鹿――稚が…」

「横島さんの馬鹿…」

こうして美神除霊事務所に新たな騒動の種が加わる事となつたのである。

「ご主人様、だあーーい好き」

後に、11人(匹)増える事になるがそれはまた別の物語である。

終れ！！

横島と狐と茜雲（後書き）

と、言つ訳ですが今の所連載化する予定はありません。

殺生石から別の九尾が生まれるのではなく、妖怪化した狐と言つ事でアカネのモデルは「天使のしっぽ」の狐のあかねでした。

守護天使にすると横島の過去の話が絡んで来るので読みきりでは難しかつたのでこう言つ設定にしてみました。

こうなると他の娘達の話も描いてみたくなったり。まあ、無理でしょうが。

さて、連載物も書かなくては。

「夕陽が照り、部屋の中だ」（前書き）

これは Z·i gant Talker に投稿していた作品ですが、ちよ
つとだけ修正して此方に引っ越ししてきました。
何時ものノリとは違い、横島死亡後の話となります。続きとなる唯
緒ちゃんの話も同時に投稿します。

「夕陽が照らす、部屋の中で」

ヨコシマクンがシンダ……

カレはモウドヨモイナイ……

カレへのオモイはモウトドカナイ……

そんなに強い魔族ではなかつた……

ただ、狡猾だつた……

劣勢と見るや人質を攻撃した……

人質は三人の子供……

横島クンはとつさに飛び出した……

止める隙もなかつた……

二人を両手のサイキック・ソーサーで……

一人を自分が盾になつて……

前の中級魔族との闘いで文珠を使い切つていたのが痛かつた……

いや、それ以前に文珠に頼りすぎなければ……

彼はあの時から死を極端に恐れるようになった……

自分の死より他人の死を……

そして私達は結局彼の心も命も救えなかつた……

頭に浮かぶのは後悔だけ……

笑顔つてなんだっけ……

あの時から私達の時間は止まつたまま……

時々思い出したように冷たい涙が頬を流れるだけ……

ヨハシマクンがシンダ……

カレはモウドコニモイナイ……

カレへのオモイはモウトドカナイ……

「アリシマの両親？」

「ええ、明日此処に来るやつよ」

「…先生の葬儀にも出ずに、なぜ今頃…」

「横島さんのお母さんは出産直前だったの」

「横島クンを驚かせようとして隠してたらしいんだけど突然の訃報で倒れたらしいわ。

それが原因でかなり危ない出産だつたんだって」

「そうでござつたか…」

「小竜姫とヒヤクメにパピリオ、そして老師も来るつて連絡があつたわ」

「……なんて言えばいいんでしょうね?…」

おキヌの疑問に答えられる者はいなかつた。
なにも言えない、いや言ひ資格さえない、
どんなに怒られようが、どんなに詰られようが、
身を引き裂かれるような罵詈雑言をえも甘んじて受け忍ぶしかないの
だから……

「私、お夕飯の買い物に行つてきます…」

「私も付き合つわ」

「…いつてりつしゃい…」

「ほー、おキヌちゃん、大根2本で三百万円だ!なんてな、ははは
は…はは…、…まあおキヌちゃん、無責任な言い方かもしけねえ

がいつまでも泣いてたって何にもならない。ただ辛さが増すだけじゃないのかな？いきなり笑えとは言わねえが少しほれ前を向かねえと……

「わうだよ、それに病は氣からとこりしのままじや本当に病氣になつちやつよ、せうなつたらあの兄ちやんだつて心配するよ？」

「……よ、横島さん？……」

「お、おこーかあちやん、あの兄ちやんの事は口にしちゃダメだつて！」

「あ、ゴ、ゴメンね、おキヌちやん？」

「ふ、ふええ……よ、横島さん……ふええ、ふえええへへへん……」

商店街から帰る途中、ふと空を見上げると真っ赤な夕陽が空を染めていた。

その赤い色を見ながらおキヌはかつて、横島が教えてくれた言葉を思い出していた。

「……昼と夜の一瞬の隙間……短い間だから余計に綺麗……」

「それって、ルシオラって女性の？」

「ええ、横島さんが本気で愛したただ一人の女性……」

「……どんな女だったの？」

「最初は敵だつた、横島さんを連れ去つてこき使つてたつて。でも、だんだんとその優しさに魅かれて、あとは私達と同じ、いつの間にか好きになつてたんだつて」

「私は……別に……」

「日が暮れちゃう、急ぎましょ……」

「うん……」

「あ、おキヌちやんにタマモちやん」

「……ピートさんに神父様……」

「横島くんのご両親が来られるらしいね、私達も行かせてもいい?」

「それからワルキューさんやジークさん。小竜姫様達も来ると連絡が来たよ、ぼくもタイガーダー達と一緒に行くから」

「……はい……」

事務所への帰り道、薄らいでいく夕焼けを横目で見ながらタマモは思に更けていた。

何時からだろ? 誰も笑わなくなつたのは?

何時からだろ? 涙が氷のように冷たくなつたのは?

分かつている、きっとあの時から。

ヨコシマが消えたあの日から……

ヨコシマの傍は暖かかった。

ヨコシマの周りではみんなが笑っていた。

だから私も何時の間にか自然に笑っていた。

……そつか、そなんだ。いつの間にかなんだ……

二つの間にか『シマ』を……

冷たい涙が頬を流れた。

翌日、私達は事務所に集まっていた。

小竜姫様と老師様、ヒヤクメ様、パピリオちゃん、ベスパさん
ワルキューレさん、ジークさん、
神父様、ピートさん、タイガーサン、雪乃丞さん、
エミさん、冥子さん、魔鈴さん、
小鳩ちゃん、貧乏神さん、愛子ちゃん、
カオスさん、マリアさん、西条さん、
そして美神隊長にひのめひちゃん、ひのめひちゃんは隊長に抱かれて眠
つていてる。

『美神オーナー、横島さんの両親が見えられました』

「そう、ここにお通じして」

『了解しました、…どうやらそのまま、この部屋です』

ガチャツ

「…………」

横島さんの『両親が遂に来た、お母さんは女の子の赤ちゃんを抱いていた。

「二度は私達の力の無さで息子さんを…すみませんでした」

二人は険しい表情のまま私達を見つめている。

そしてお父さんが口を開いた。

「あいつの、忠夫の最後は……、最後はどうだつたんですか？」

「はい、人質を取られて苦戦しましたがなんとか追い詰めることに成功しました、しかし相手は私達の隙を突いて人質の子供達を攻撃しました。横島ク…息子さんは子供達を守るうとして自分を盾に…」

…

「……ですか、私達より先に死んで親不孝者と怒るべきなのか人質の子供達を救つた事をよくやつたと褒めるべきなのか、私達はどうすれば……」

「褒めてやつて下され！」

「シロ！」

「……君は？」

「拙者は横島先生の一番弟子の犬塚シロと申します」

最初の出会いは空腹に耐えかねて先生の食事を狙つた時。その時に見た靈波刀は見事でござつた。

すぐに先生に弟子入りをして父上の仇を取ろうとした。

その後犬飼に返り討ちにあい大ケガをした拙者を美神殿と先生が靈波で治療してくれて目が覚めた時には超回復によつて拙者の体は大人になつていたでござる。

その頃は先生の事は師匠であつビ」となく兄上とこつた感じであった。

でも、だんだんと自分が女などと自覚していくとその気持ちが変わってきたのがわかつた。

ああ、拙者は先生が好きなんでござるな。

しばらくの間修行のため人狼の里から出れなくなつた。

あのアシュタロスの事件の時も里に妖共が襲つて来て里を守るので精いっぱいですぞ。先生のことば信じていたからあまつ心配はしてなかつたのですぞ。

美神殿の所にタマモと居候することになつた時にも先生はいつも通り元気であった。

いつも笑つていて……だから氣付かなかつたでござるよ……先生の傷に……

「シロ……」

シロは泣いていた。私もいつの間にか泣いていた。

超感覚で私にも分かったのだ、シロが何を感じているのか。

ヨコシマのバカ……。

私達をこんな気持ちにさせといて、自分はそつと居なくなつて……

……

「ふあ……」「

「あつ、まざい。ひのめが田を覚ましたー。」

「まずいって、その子がどうかしたの？」

百合子が不思議そうに訊ねてきた。

「ひのめは横島君に、息子さんに一番懷いてまして、目を覚ますとすぐに横島君の姿を搜すんです。そしていないとわかるといつも大泣きして…」

そう言つてゐるとひのめはいつも通りに横島の姿を探し始めた。
そして、百合子が抱いている赤ん坊を見つめると。

「ふあ、だああ」

果然としている旨をよそにひのめはその赤ん坊に手を伸ばして呼びかけた。

卷之三

「……に一について……もしかして……」の赤ちゃんって、横島クンの

• • • •

「ヒヤクメツー」この赤ちゃんの靈視を

わかつたの、やつてみるの。」

赤ん坊の靈視をしてみると、ヒヤクメの目からぱりぱりと涙が零れてきた。

「よ、横島さん…横島さんなの…」この赤ちゃん、横島さんの生まれ変わりなの！」

どうなく虚ろだった皆の瞳にだんだんと光が戻ってきた。

「な、何だつて…」この子が…、この子が忠夫の生まれ変わりなんですか？」

「間違いないの、この子の靈波は横島さんのと全く一緒なの…！」

百合子は腕の中の赤ん坊を見つめながら…涙を流しながら語りかけた。

「そつか…忠夫、また私達の子供として帰つて来てくれたんだね…」

「は、はははは…忠夫はおかしいだろ。この子は女の子なんだから…」

大樹も泣きながらそう言つた。

「うへ、ふああ～～…」

「あら、お姫様はお目覚めのよひね」

百合子の腕の中だ目を覚ました赤ん坊は令子達を一人一人見つめて、

「ふあつ」

そして微笑んだ。

「皆、抱いてみる?」

「百合子はもう言つてしまはずは令子に抱かせた。

「横島クン…もつナンパは出来そうにないわね…」

次はおキヌに抱かせた。

「横島さん…今度は女の子だからお料理、教えてあげますね…」

次はシロに抱かせた。

「先生…今度は拙者が靈波刀を教えるでござるわよ…」

次はタマモに抱かせた。

「アーリシマ…もし、アーリシマをいじめる奴がいたら今度は私が助けてあげるからね…」

それからは、小竜姫、老師、ヒヤクメ、パピリオ、ベスパ、ワルキユーレ、ジーク、唐巣、ピート、タイガー、雪之丞、エミ、冥子、魔鈴、小鳩、貧乏神、愛子、カオス、マリア、美智恵、と一人づつ抱いて声をかけて行つて西条の番になりいざ、彼が抱いだつとすると。

「ふあ～～あ…むにゃむにゃ…す～、す～」

と、美智恵の胸の中で再び眠りについてしまつた。

そんな赤ん坊を見ながら西条が、

「よ、横島君、君ねえ？」

と、抱いりつと差し出したままの手をワナワナと震わしながら弦いた。
あると。

「...」

۱۰۷

「はははははは、もうダメだ…」

卷之三

誰からともなく笑い出し、そして全員が笑い出した。

あの日かじ久しぶりの笑い声だった。ふと気がつくと事務所の周りには横島にゆかりのある石神や浮遊霊たちが集まっていた、生まれ変わつて来た横島を祝福するようだ。

「あはははははは……（そうか、笑うつてこんなに簡単な事だつたんだ。横島クンがいれば皆が笑える、横島クンがいてくれるだけで笑顔になれる）」

窓の外を見ると何時の間にか空は赤く染まつていて、部屋の中には夕陽が射しこんでいた。

そんな彼らをはるか空の上から見つめている存在があった。

『皆、笑っていますね』

『ああ、横っちの魂を逆行させ再びあの両親の子供として転生させる。かなり強引な方法やつたけど苦労した甲斐かいがあるな』

『しかし、ルシオラの魂も横島さんの中にあるままですからこれからどうなるか』

『まあ、今度は横っち自身が産む事になるさかいあまり問題はないやろ』

『そうですね。しかし私達に出来るのはここまで、後は横島さんが今度こそ健やかな人生を送れる事を祈りましょう』

『せやな』

そして彼ら一柱は光と共に天へと消えて行つた。

「す／＼、す／＼、」
「く／＼、く／＼、」

百合子さんはママの腕の中で一人の赤ちゃんは寄り添つよつて眠つ

ている。

横島クンは死んだ。

彼はもういない。

彼への想いはもう届かない。

でも、新しい命を持つて帰つて来た。
新しい命でこれから的人生を共に生きて行く。
例え隣を歩けなくとも同じ世界で生きて行ける。

夕陽が照らす部屋の中に笑い声が響く。

夕陽が照らす部屋の中で私達は笑顔を思いだした。

夕陽が照らす部屋の中で私達の時間は再び動き出した。

（完）

「夕陽が照りぬ、部屋の中で」（後書き）

と言ひ訳で書いてしまった横島死亡後の話。
実はこの話、僕が一番最初に思いついたG.S美神のS.Sだったりする。

生まれ変わつて来た彼女の名前は唯緒ただおです。

…解つてます、何のひねりもないという事は解つています。

頭の中にはネギマーとのクロスに持つていく予定。（あくまでも予定、書くかどうかは未定）
では、この辺で。

「唯緒、はじめてのなつかし」（前書き）

横島が生まれ変わった唯緒ちやんのお話。
自分で書いてて、てほてほする唯緒に密かに萌えていたのは想ひと僕
だけの秘密、約束だ！！

「唯緒、はじめてのおつかい」

「じゃあ唯緒ただお、使いをお願いね」

「うそ、こいつへやね。おかあさん」

てぼてぼてぼてぼてぼてぼてぼてぼてぼてぼ

唯緒は可愛^いい足音を鳴らせ、腰まで伸びた長く艶やかな黒髪を揺らしながら商店街の方へと走って行く。

百合子は付いて行きたい衝動に駆られるがぐつと我慢した。これは唯緒の初めてのお使いなのだ、もし付いて行ったのがばれると暫くは口を聞いてくれないだろう。

実際に以前怒らせてしまった時は一週間もの間口を聞いてくれなかつた、その時は余りの寂しさで唯緒の方から話しかけて来てくれるまでかなり老け込んでいたらしい。

「それにあんまり心配する必要もないのよね」

そう呟き、唯緒が道の角を曲がるのを見届けると家中へと入つて行く。

てぼてぼてぼてぼてぼてぼてぼてぼてぼ

「えへへ～～、おつかいおつかい、はじめてのおつかい」

横島唯緒、三歳。この少女は「魔神大戦」での英雄、横島忠夫が生まれ変わった姿である。

彼は魔族との闘いの際、不運の死を迎えたが最高指導者達の手によつて少し時間をさかのぼつての転生で再び横島夫妻の子供として新たな生を受けた。

「おや、唯緒ちゃん。お出かけかい？」

八百屋のおじさんが話しかけて來た。

「うん！唯緒ね、はじめてのおつかいなの」

「そうかいそうかい、唯緒ちゃんはえらいねえ～～」

「えへへ～～、唯緒、えやいの。えっへん！～」

誉められたのが嬉しくらしく、唯緒はその小さな胸を張る。

「じゃあ唯緒ちゃん。ウチの野菜も買って行ってくれないかい？唯緒ちゃんに『食べてほし～～』って言つてねよ」

八百屋の親父はさう言いながら手に取つた野菜を一つ唯緒に差し出す。……が。

「や～～～！タマネギ、きや～～～～！」

唯緒はすぐさま逃げ出した。

「まはまは、タマネギが嫌いな所は変わらねえな

走り去つて行く唯緒を見つめながら親父は笑っていた。

その頃、町の上空に一つの影が漂つていた。

それは他の町で雑靈や低級靈を吸収して、今では下級魔族ほどの力を得た惡靈だつた。その惡靈は力を求めていた、神にも匹敵するほどの力を得て世界に君臨したいと。

『足りない……まだ足りない。もつと、もつと力を……ん?』

そんな惡靈の視線の先には一人で歩いている唯緒がいた。

『あの小娘、かなりの力を持つているな。いいぞ、あの小娘に取り付けば生き返れる上にかなりのパワーアップが出来る。フフフフ、ハアーハツハツハツハツ！グウ――ツドタアイミィングウウウ――!』（こ・セルの中の人）

そして惡靈は唯緒に乗り移る!と上空から舞い降りて来た。……が、

『浮幽靈・烈波あーーっ！』

『ぐはあっーーー!』

突然襲いかかって来た浮幽靈による多段アップバーに惡靈は吹き飛ばされる。

『な、何だいきなり！？』

『スーパー・浮幽靈・キイーークッ！』

『がはあっーー!』

今度は上空からの激しい蹴りが襲いかかる。

地面に叩き付けられるかと思った瞬間、何者かに掴まれる。

『貴様、今唯緒ちゃんに何をしようとした?』

は？

厳つい親父の幽霊が凍りつきそうな視線で悪靈を睨みつける。そして…

『白練靈・ブリッジッ!!』

肩の上に抱え込みギリギリと背骨を逆方向へと押し曲げていく。

『さあああああ——つー』

放り投げられ解放されたかと思ったのもつかの間。

次は俺だ

別の幽霊に両腕を掴まれ、ふとももの所を両足で固定され、そのまま両腕をひねり上げられる。

『自縛靈・スペシャル！！』

『があああああ———つ！』

『次は私に任せてもらおう』

老紳士の靈、彼の名は鷺五郎。孫の守護靈をしていたが余りの孫の粗忽さに愛想を尽かし今では自称唯緒の守護靈として彼女を影ながら護つている。

愛用のステッキを中段に構え、悪靈に向か一歩を踏み出す。悪靈は見た。その刹那、ステッキが九本に分かたれたのを。

九守護靈・龍門

漆
捌
壹
貳
肆
參

剣術の基本である九つの斬撃が全てが一瞬にして悪霊を襲う。

『ああああああ——つ——』

「お次は私だ」

石神は悪霊を上空に放り投げるとマッシュルな星の王家に伝わる三大奥義の一つを繰り出す。

『土地神・スパーク!!』

悪靈は何が何だか分からなかつた。

自分に手を貸して貰うのが、少くとも、少しは、何とか出来ない筈なのに。

だが実際には触れるどこのかもはや逆に滅ぼされる寸前である。

そう、悪靈は知らなかつた。助けられてばかりで助ける事が出来なかつた彼女の前世、忠夫の為にも彼の生まれ変わりである唯緒を護つうと街の住人だけでなく幽靈達も彼女を護つてゐる事を。

其処に騒ぎを聞きつけたのか唯緒がやつて來た。

「みんな、なにやつてゆの？」

唯緒は可愛らしく小首を傾げながら聞いて来る。

彼女にとつて彼等は自分と仲良くしててくれる友達であつて、幽靈だからと言つて怖がつたりする事は無かつた。

そんな唯緒を見て、幽靈達は途端に『デレデレ』になる。
何の事は無い。前世がどうのこののではなく、彼等はただ単に唯緒に萌え萌えなだけの様だ。

『何でもないよ。自分でプロレス『』をしてたんだ』

「そりなんだ。唯緒はねえ、はじめてのおつかいなんだよ」

『そりか〜、唯緒ちゃんはえらいんだねえ〜』

パチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチ

皆は顔を綻ばせながら拍手をし、悪靈も何故かつられて拍手していた。

「えへへ〜〜〜〜〜〜〜

唯緒は照れながら後ろ頭を搔くのであった。

『ち、急がないと。お母さんに怒られるよ』

「うん、こつてくみね。ばいばい』

唯緒はその小さな手を振ると、可愛らしい足音を鳴らして走り去つていいく。

てぼてぼてぼてぼてぼてぼてぼてぼてぼてぼてぼてぼてぼてぼてぼてぼ

幽靈達は『テレテレ』の表情で手を振つていたが彼女が見えなくなると途端に冷たい表情になり、

『わひと、そろそろ終わりにするか』

そつ言いながら田漢の幽靈が悪靈を掴むと、遙か上空へと放り投げる。

『浮幽靈・スカウティング・ボンバー！』

『うわああああ――――――――』

『さあ、ジョームズ伝次郎。止めだよ――』

『OK――レッツ・ミュージック！――』

伝次郎はマイクを取ると、その歌声を悪靈に叩きつける。

コンタリー・ウェーブ

『ガ ガ ガン 、 ンガ ガ ガ 、 ン ガガ 、 ガ ガ ガ ガン

、
ンガ、ガ、
ガガ、ガーオーイー
ー

悪霊の体は徐々にひび割れて行き、最後には

ガ一 ガ一 ガア――――！」

巨大な金色のロボットの幻影が現れ、巨大なハンマーを振り下ろして来た。

『嫌ア――――ツ――!』

そして、悪霊はそのまま光になつて消え去つた。

『アーティストの心』

空しい叫びを響かせながら

『イエーイツ！サイコーだツズエ！』

ヒトイチニシ・...・イヒ

そう、百合子が安心して唯緒を送り出したのは彼等が唯緒を護つて

彼等の萌えパワーは上級神魔族にも匹敵する。

『これが勝利の鍵だ……。』

そして唯緒はようやく田地の肉屋にたどり着き、店の中に入るとすぐに店の主人が出てきた。

「ここにちわーー、おつかいにきたよ」
「いらっしゃい、唯緒ちゃん。何が欲しいのかな？」
「あのね~、とつせん……」
「ん~、ここは肉屋でペシト屋ではないんだよ。鳥せん
はいないかな~」

ちやんと鶏肉を買こに来たところ事は分かっているが少し意地悪氣味に言つてみる。

すると案の定唯緒は少し困った顔になる。

「あのね、ちがうの。とつせんをかいにきたんじゃなくてね、え~
と、え~と……そうだ、とつのおにくせん……」
「せつか~、鶏肉だね。じゃあ、鶏肉をいくつ欲しいのかな?」
「え、いくつ?……え~と、ん~と。あ、そうだ~おかあせんこ
めもをかいてもひつたんだつた」

やつぱりヒボシヒットからメモを取り出し内容を確認する。

「え~とね、しゃんあるせん」

そう言いながら小さな手で三本指を立てると笑顔で突き出し千円札を差し出す。

「鶏肉を300円だね。よく言えました」

「唯緒、えやい？」

「うん、偉い偉い」

そう、肉屋の親父は笑顔で唯緒の頭を撫でてやり、鶏肉の入った袋を持たせお釣りをポシェットに入れてやる。

「えへへ、じゃあしゃよなや」

笑顔で手を振りながら唯緒は店を出て行き、扉が閉まるとき親父は店の奥に隠れていた妻に声をかける。

「首尾はどうだ？」

「勿論、完璧だよ」

店の奥から出て来た妻のその手にはビデオカメラが握られており、さつそくその映像を確認すると一人の鼻からは赤い液体が零れてきた。

「ああ～～、唯緒たん。何で可愛いんだい」

「さあ、何時までも萌えている場合じゃない。さつそくダビングして百合子さんに渡さなきや。そつすれば見返りに唯緒たんのお昼寝の姿を録画したDVDが貰える事になつてるんだからね。怠ぐんだよ、アンター！」

「合点だー！」

何と言ひ事でしょー！百合子は家の唯緒の映像のDVDを取りに

使い、各方面での色々な唯緒の映像を手に入れていたのです。

もつとも、公開できない（する気もない）秘蔵映像もあるのだが。（例えて言ひならおねしょをして涙ぐんでいる唯緒の映像とか）

卷之三

唯緒が家に向かって歩いていると公園の中に見知った人物を見つけた。

「あー、タマサおねえちゃん。」

「あら、唯緒じやない。どうしたの、一人？」

九尾の狐の転生体タマモ。彼女も唯緒の前世である横島忠夫に想いを寄せていた一人であり当然、生まれ変わりである唯緒の事も可愛くて仕方がない。

ヒューマン・リソースマネジメント

「わ
い」

ぽふつ

唯緒はタマモに駆け寄るとその足に抱きつぐ。

「ゲンウ...」

タマモは自分の足に抱きつき、頬をスリスリと擦りつけて来る唯緒

に精神的な大ダメージを受ける。

「た、唯緒……？」

「タマモおねえちゃん、だっこ」

唯緒は満面の笑みで両手を差し出し抱っこをせがむ。

「さあれらっ！」

かいしんのいちばき、タマモに一億のダメージ。
もう止めて、私のライフは止まることも止めないで。

唯緒は両親以外ではタマモに一番嫌いでいる。
もつともその理由は赤ん坊時代に彼女のナインテールをおもひき代
わりにしていた為という事はタマモの為に内緒にしておこう。

「タマモおねえちゃん、どうしたの？」

「な、何でもないわよ。そうか、抱っこだつたわね」

何とか“川岸”から戻って来たタマモはやっくつと唯緒を抱き抱え
る。

「それより今日はじめたの、田舎子さんは一緒にじゃないの？」

「きみうはね唯緒、はじめてのおつかいなの。だからおかあさんほ
うつりであるすばんなんだよ」

「そつ、ちゃんと使いが出来たんだね。じゃあい、褒美にお姉ちゃ
んがアイスを御馳走してあげる」

「え、ほんと あ、でもみちくせたべたらおかあさんにおいりねち
やう」

「大丈夫よ、ちやんと田舎者をこなはお姉ちゃんが言つてあげるか

「わーーーいつ」

それから唯緒はタマモの膝に座つてソフトクリームを舐め、タマモ
は鼻歌を歌いながら唯緒の長い髪を自分と同じナインテールにまと
めていく。

そんな一人をシロは草むらに隠れ、血の涙を流しながら撮影してい
た。

「べっぴんへへ、あの時グーセえ出さなければ……」

実はこれも百合子の依頼、百合子は唯緒の撮影を一人にも頼んでい
てその為、どちらが遊び相手になつてどちらが撮影係になるかをジ
ャンケンで決め、勝つたのがタマモだったのだ。

「おいしかった、タマモおねえちゃんありがと」

アイスを食べ終えた唯緒はタマモに向き直つて「ひとつ笑顔を浮か
べる。

「どういたしまして。で、早く帰らないと百合子さんが心配するわ

۹۱

「うそ、じゃあ唯緒かえゆね」

そう言い、ベンチの上に立つとタマモの頬を両手で掴みタマモが何かを言う前にその脣に自分の脣を重ねる。

「レ」

」！・！・！・！・！・！」

「…………えへへ、しゃぶなやのやうだいよ——。じゅる、タマキね
ねえぢやこめたね。ほこまへ——」

てほてほてほてほてほてほてほてほてほてほ

唯緒はベンチから飛び降りるとタマモに別れを告げて可愛い足音を鳴らして走り去つて行く。

そんな中……

「」んのお～～女狐え～～～つーーよくも先生の可憐な顔を奪いお
つたなあ—————つーー

我慢の限界を超えたシロは隠れていた草むらから飛び出し、号泣しながらタマモに詰め寄つて行く。

彼女だけは何故か先生という呼び方を変えようとはしなかつた、彼女曰く『先生はたとえ生まれ変わつても先生に変わりはござらん。将来、拙者が靈波刀の師匠になつたとしてもこの呼び方だけは変え

ねつせなこじるれぬ』との轟だ。

「聞いておるのかタマモー！ 何とか言つたら、……？？ タマモ？」

肩をゆすつても反応が無いのでシロはタマモの顔を覗き込んで見ると……

「…………タ、タマモ…………お、おぬし……せつであったのか？」

タマモは何処かのボクサーの様に真っ白に萌え尽きて逝た。
（誤字）

「タマモ、おぬしが…おぬしが漢であったよ…ヤハラギドリ」

シロはそう言いながら滝の様な涙を流し萌え尽きて逝るタマモに敬礼をした。

カリシ、カリシ、カリシ、カリシ、カリシ、カリシ、カリシ、カリシ

मूलतः अस्ति अस्ति अस्ति अस्ति अस्ति अस्ति

レトロモード

唯緒が走るとその足音と同時にタマモに詰わえられた黒髪のナイン

テールが揺れる。

「ぐはあつ」「

「な、なんという破壊力！！」

「ハアハア、唯緒タン」

「いかん！」「イツは危険だ、連れて避け！…」

そんな風に唯緒が家に向かって走つていると、ある一組の親娘が唯緒に話しかけて来た。

「あら、唯緒ちゃんじゃない。どうしたの？」

「にーにー わーい、にーにだ」「

唯緒をにーにと呼びながら走り寄つて来るこの少女は「美神ひのめ」。

美神美智恵の娘で唯緒より三カ月ほど年上である。（そいつの事にしていてください）

彼女は赤ん坊の時、忠夫が唯緒として生まれ変わつて來た時、最初にそれに気付いた人物であり成長した今も唯緒の事をにーにと呼び続けている。

「あ、美智恵おばちゃんとひのちゃんだ」

「にーに、ひのとあそぼ」

「うーん、いまはダメだよ。唯緒はおつかいのとひゅうだからせやくかえやないといけないの」

「やーーーひの、にーことあそぶの…」

「いやひのめ、我儘言つたら唯緒方やんが困るでしょ」

「アーヴィング、お前がアーヴィングだ。アーヴィングだよ。アーヴィングだよ。」

「わーーい。ひの、ひーー」とニッコリ笑って

「いいの、唯緒ちゃん？」

「うん、唯緒もひのちゃんとあしおびたいもん」

卷之三

そして二人は手を繋いで走つて行く。

トヨタ自動車販売株式会社 × 2

「またたくひのめつたら、唯緒ちゃんと仲がいいのは嬉しいんだけど……あの娘、まともな恋愛できるのかしら？」

美智恵のその心配は将来さらに深刻な物になるのであつた。

そうして唯緒は無事に家まで帰りついた。

「ただいま～～」

「おかえりなれこ、唯緒。あいかわらずお嬢様のめでたしさがうつるよ」「んて、おばちゃん

「おかあさんただいまっ！はい、とのおじいちゃんがつてましたよ」「よく買って来てくれたわね。唯緒はお利口さんでいい子よ」

にこにこ笑いながら唯緒は買つて来た鶏肉を百合子に渡し、百合子は唯緒を抱きしめて頬ずりをする。

「ああ～、くすぐりたいよおかあさん」

「アーティスト」

「うん！おかあさん唯緒、ひのちゃんとあしょぶね」
「あ、分かつたわ。ひのめちゃん、ゆつくりして行きなさいね

一
は
い

そうして一人は唯緒の部屋へと行き、暫くあるともやつともやつと楽しそうな笑い声が聞こえて来た。

「ほんにちは、田舎子さん。ひのめがお邪魔します」

「あらしき」にしやし美智恵さん
やんが来てくれて喜んでますし
かましませんよ
嘘緒もひのめち

その後、帰つて来た父親と一緒にひのめと美智恵も横島家で夕食を食べ、ひのめはどうやら今夜は泊つて行く事にしたようだ。

「ふう〜、満腹だ。唯緒が勝つて来てくれた鶏肉はとっても美味しかったぞ」

「えへへ～、おじよまゆしゃまでした」「ぐつ……ううう……あーーっ!! 唯緒は木

! !

大樹は涙を吹き飛ばしながら唯緒を抱きしめて頬ずりをするが唯緒は頬に擦れる髭を痛がる。そして当然……

「何やつともんじゅ——つ——！」
唯緒が痛がつてゐやないか、こ

六宿の！」

ノルマニカノトキノシテ

モザイク処理が必要な物体になり下がつたのであつた。

「さ、あんなのは放つておいて一人でお風呂に入つてらつしゃい
『はーい』

「朝まで逝つとれー！」

「ぬあ―――つ――」

かいしんのいちげき

タイジュをやつつけた（笑）

「おひやー... ひーひー... すうあい」

「へへへへ... むにゅ... えへへ」

そしてひのめと唯緒は一つの布団の中で寄り添つよつて寝つこう元に寝てひのめは

「まつたぐひのめつたら、夢の中まで」

「ふふふ、唯緒はどうな夢を見ているのかしら」

娘達の穏やかな寝顔を見ながら母親達の顔もまた穏やかだった。

そんな唯緒の見る夢は……

『おこじちやーん』

『お、来たな唯緒』

夕焼けに映える草原に横島忠夫は立っていて、走り寄り飛びついて

来る唯緒を優しく抱きしめる。

『おじいちゃん…やよい、唯緒ね、はじめてのおつかいがんばったんだよ』

『そつか～～、唯緒は偉いな』

『えへへ、もっとなでなでして／＼／＼』

唯緒は兄、忠夫に頭を撫でられながら忠夫の胸にじゅれ付いている。

何故此処に一人がいるのか？それは最高指導者達によつて逆行転生した際に男ではなく女として転生した為かその体にはもう一つの意識が生まれていた。

その為横島は新しい体をその意識に譲り、自分は守護霊といつた立場で唯緒の意識下に引っ込んでいた事にしたのだ。

だから唯緒が眠りについた時などにこうして意識下で会い、話しあう事などが出来るのであった。

『しゃしてね、タマモおねえちゃんにアイスをもらひにまひつてひのちゃんとあしょんでおふろもいつしょにほいつたんだよ』

『良かつたな、唯緒』

『うん』

膝の上に抱いた唯緒と遊びながら横島は彼女の事を考えていた。

『ルシオラの魂は何故か唯緒の方に入ってしまってるからな。唯緒も将来は人外の力を得るかもしれん、例えそんな事になつたとしても俺が必ず護つてやるからな！！…………しかし、可愛く成長した唯緒に悪い虫が着くと思うと……、許さん！！ 唯緒と付き合つにはまず俺に勝つてからでないとな。フフフフフ』

何気に横島もパソコンの兄バカになつてゐる様だ。

膝の上で無邪気に笑う唯緒を見て横島はただ、彼女の穏やかな幸せだけを願つていた。

『俺の、いや俺達の分まで幸せにならなくちゃな。なあ、唯緒』

（fin）

「唯緒、はじめのめつかご」（後書き）

とこの説でとりあえずの終わつ。

唯緒と忠夫は同一の存在であると同時に兄妹でもあるといつ設定です。

ですからネタバレな事を言つと唯緒が影法師シヤドウを出したとしたら横島鳥が出て来るといつ裏設定もあつたりします。

続きは「ネギま!」とのクロスを考えていふといつたけび「タダオキュー」にも繋げよつと思えば繋げられるんだよな、困ったもんだ。

では「」の辺で。（>○<）ノシ

魔法少女！？ タタオキュート（前書き）

Z·E·R·O·N·T·A·L·K·E·Rから引っこ越してきました。

この作品の横島は唯緒ではなく、忠緒といつた前です。

……まあ、一度頭が病んで逝た時に描いた作品です。
元ネタは「おと×まほ」でござります。

魔法少女！？ タタオキュート

時間は深夜、誰もが眠りに就いているであろう時間帯。

ガオオオ――――ンッ――

異形の姿をした巨鳥は少女に襲いかかるが少女は何とか、かわして行く。

ガオオオオオーーーツ！！

再び襲いかかる巨鳥の爪に少女のコスチュームの一部が切り裂かれ、
その肌が少し晒される。

ゲッゲゲゲゲゲゲゲ

巨鳥はその姿を見ていやらしそうに笑う。

「よっしゃーーっ!! ナイスだ、もう一声ーー。」

そんな少女と巨鳥の闘いを屋根の上からビデオカメラで撮影していく

る小さな動物がいた。

「…………うーー！ ラル、何してるんだよーーうーー！」

「いや――、せつかくだがら記録映像を」

「そんな物撮るな――――！」

彼の名はラル。オーディョの姿をした少女のパートナーである。

「そんな事よつ早くアーデメを」

「分かつてゐよ、行つけ――！」 グローリー・フェザー。
“紅い

羽根乱舞

少女の持つてゐる杖、グローリー・フェザーに付いてゐる片翼が羽ばたく様に開くと、幾重もの紅い羽根が巨鳥に襲いかかる。

ギョウワワアアアア――――――――――

巨鳥は断末魔の悲鳴と共に光となつて碎け散る。

「ふう、やつと終りつわった

少女は安堵のため息を吐くが、ラルはそんな少女の姿をローアングルで撮影していた。

「うひひひひ、今日もいい絵が撮れた。さあ、早く帰つて編集を……ふざやつ……！」

少女はラルを思いつくり踏みつけないとビデオカメラを取り上げる。

「没收！！」

「そ、そんな… 酷いよタダたん」

「酷くない、それからタダたんって呼ぶな！！ それに大体……」

少女？ はビーテオカメラからDVDを取り出しタイトルを確認する。

「何なんだよ、この恥ずかしいタイトルは！？」

「何つて？ 見た通り『魔法少女・タダオ』… ぶげらつ…！」

少女？ はラルを力一杯に踏みつける。

「少女じゃない！ ボクは男だ――！」

少年の心からの叫びは夜空へと消えて行く。

彼の名は横島忠緒、いわゆる世間一般で『男の娘』である。

「魔法少女！？ タダオキューー！」

「タダたん、朝だよ。早く起きないと遅刻するよ」

ラルは料理帽を被り、フライパンとお玉を打ちならしながら忠緒を起こす。

「うう～、まだ眠いよ～」

「ダメダメ。さあ、朝食の用意は済んでるから早く来てね」

部屋を出て行くラルを見つめつつ、忠緒は着替えを始める。
勿論ラルが出て行く時にこつそりと少しだけ開いて行つた扉を閉めるのは忘れない。

チツ

舌打ちが聞こえたがどうあえず後で一発殴つておこうと思つ。

彼の身長は145?ほどで長い黒髪は膝裏まで伸びており、家訓という事で切らせてはもらえない。

母親と父親は海外出張で今は母親の妹である横島百合花と暮らして
いたが、百合花は友人と「世界各国ぶらり旅」に出てしまい今はラ
ルと一人暮らしである。

その際に百合花は魔法少女、“チユーナー”の役目を忠緒に押し付
けて行つたのだった。

聞けばその友人の子供も魔法少女を押しつけられたらしい。
(接触がない為、その子供もまた男の娘だという事を忠緒は知らな
い)

その後、学校に登校した忠緒が机に突つ伏していると後ろから声が
掛けられてきた。

「よつ、どうしたんだ忠緒。えらく疲れてるみたいじゃねえか」
「あ、雪之丞おはよ」

「イツの名前は伊達雪之丞、一応ボクの親友だ。

まあ、出会いは何と言つか最悪だつた。入学式の時、いきなり「ママに似ている——！」と叫びながら飛びかかつて来たんだから。それからは何となく気がついて、今では親友と呼んでもいい位の関係にはなつてこる。

……それでも時々思い出したかのよつ「ママー」飛びかかって来るのだが。

「やあ、横島、雪之丞、お早う」

「お早うメガネくん」

「何だ、やけに機嫌がいいなメガネ」

彼もまた、僕のクラスメイト。名前はサトシと言つりしげ（こゝ・千葉繁）何故か皆はメガネと呼ぶ。

「いやー、昨夜いい物を見ちまつてな。驚くなよ、魔法少女だよ、魔法少女」

「ふつ……」ガツンッ

「どうしたんだ忠緒？」

「い、いや別に……」

「ならないんだが、それにしても魔法少女だと？。メガネ、お前頭大丈夫か」

「ふつ、何とでも言つがいい。俺は今猛烈に感激している、凄いぞ、

時空管理局は本当にあつたんだ！…

（つづ、見られてたなんて…ん？）

忠緒が頭を抱えていると鞄がもわもわと動いてくるのに気がついた。

（ひょっとしてラル？）

ボクは鞄を掴むと廊下へと駆けだした。

「おー、何処に行くんだ忠緒

「ち、ちゅうとね

鞄を抱えたまま廊下の角を曲がると、其処にはよく知っている顔があつた。

「忠緒じやなこ、びづいたのよ~」

「あ、令子先輩

この人は家の近所に住む美神令子さん。子供の頃からの知り合いでお姉さんぶつている、普段は優しいんだけどその分怒るとものすごく怖い。ちなみに、学校では先輩と呼ばせてるけどふだんはお姉ちゃんなど呼ばないと怒る。

「鞄なんか抱えて…もしかしてサボるつもりじゃ

「ないないない、ありません…」

「そう、ならいいんだけど」

「えへ~と、令子先輩がいるつて事は…」

「勿論いるわよ」

令子先輩はそう言しながらボクの後ろを指さす。

「えへへ～、タダちゃん～見～つけた」

「うわっ…」

後ろからボクを抱きしめてくるのは六道冥子さん。
近所にある大きなお屋敷にすむいわゆるお嬢様。
一人つ子な分ボクを弟として可愛がってくれる、それはいいんだけど若干行き過ぎな感じもする。

「冥子先輩、離してください」

「ふ～～、先輩なんて～他人行儀な～呼び方したら～いや～～。お姉ちゃんつて～呼んで～」

「ちょっと急いでるんですよ、離してよ…お姉ちゃん

「うん、えへへ～～」

お姉ちゃんと呼ばれて気分を直したのか、素直に離してくれる。

「何かあつたの?」

「うん、ちょっとね」

「…無理やり聞こうとはしないけど話せる事は話しなさいよ。アンタの事は百合花さんに頼まれてるんだからね」

「うん、ありがとう令子お姉ちゃん」

「ば、馬鹿! 学校では先輩と呼びなさい! ! !」

「は、はい。令子先輩! !」

「ホントは～お姉ちゃんつて～呼ばれたい～くせに～」

ボクはその場を離れるトイレの個室に駆け込み、鞄の中に隠れていたラルを掘み出した。

「何やつてるんだよラル」

「い、いや。タダたんがかなり疲れているみたい何で心配になつて」

「本音は？」

「学校ならではのお宝映像を」

ギュ~~~~~ツ！！

「「」、「ゴメンなさい！！ 絞らないで、色々と出ちゃう…」

「そんな事より、どう言つ事なんだよーボクの姿見られちゃつてる
じゃないか、認識障害の魔法がかかつてるんじゃないの！？」

「あのねタダたん、認識障害の魔法はね姿が見えなくなるんじゃ無
く本人と認識出来なくなる魔法なんだ。つまり知り合いに見られた
としても正体がタダたんとばれないんだよ

「そんな話聞いてな…！！」

チリツ…チリツ…

その時、耳の奥を突つつく様な“雑音”が聞こえてきた。

「ラル、これって」

「どうやら出たみたいだね。“ノイズ”が

忠緒は慌てて廊下に出る。

ザザザザザザザ…

“雑音”は更に大きくなり、黒い影が徐々に異形な姿をとつて來た。

「タダたん、魔法少女の出番だよ」

「で、でも、ここは学校だよ。皆に見られちゃう」

「でも闘わないと頭が傷つこちやうよ。令子ちゃんとか眞子ちゃんとか」

「……分かつた…」

「さあ、タダたん！“意味在る言葉”を…！」

「グローリー・フューザー…！」

忠緒オリジン・キが杖の名を呼ぶとグローリー・フューザーは呼びかけに応じて手の中に現れる。

そして変身のキーワードである“意味在る言葉”を叫ぶ。

「“昼と夜とを紡ぐ朱あか！”」

その言葉と共に忠緒の足元には魔法陣が描かれ、其処から光の粒が螺旋状に舞い上がり、忠緒の服は光になつて消えて行く。

「さあ、いよいよ始まりました…！」

ラルは興奮しながらビデオカメラで撮影を開始する。

「少しば懲りるーーー！」

忠緒は杖を振つグローリー・フューザーてそんなラルのビデオカメラを粉碎する。

「あーーっ！僕の3万9千8百円が…！」

「ふんっ、いい気味」

そして、服がほぼ消え去った時…

「何の騒ぎ？」「

廊下の角から令子が現れた。

「へ、今更何を？」

「ひやつ……！ な、何これ？……つて、何をやつてゐるのよ忠緒……？」

何が認譲障害だよ。しかし、かりはれてるじゃなし

「いや、さすがに変身前には認識障害は関係ないよ」

「見ちゃダメーーーー！ 見ないで令子お姉ちゃんーーー！」

忠緒は瞳を涙でうるませながら両手で下半身を隠し後ろを向く。しかし、彼は男ゆえに胸は無く、ささやかながら（涙）男性としての象徴はあるがそれ以外は女性の様な完璧なまでのプロポーションを持つていた。

「そ、そんな事言つたつて／＼／＼

令子は田を反らせずにその光景を見つめている。

「そうだよね、こんな素晴らしい光景から田舎を反り出すなんてできないよね」

「へ……ラルが喋つてる――――――！？」

そういう言つてゐうちに忠緒の服は完全に消える。

さあ野郎共！！ 覚悟はいいか？
ここからが本番だ！！

光の粒は螺旋を描く様に空へと昇り、長い黒髪も巻き上がる。

そして光の粒が体を包むと白スクミみたいなボディースーツに変わる。ボディースーツの上にはメイド風味の入ったセーラー服に際どいミニスカ。

足を包んだ光はハイソックスに膝まであるブーツに変わる。（つまりは絶対領域！）

両手首には赤いリボン、長い黒髪は右側⁸と左側²のアンバランスなツインテール。（だが、それがいい）

魔法少女タダオキュー、変身完了！…

「うう～、れ、令子お姉ちゃん…見た？」

忠緒は顔を真っ赤に染め、瞳を潤ませながら令子に聞く。

「ひや、ひやひやほ…あんひや～ひや～…」

令子もまた、真っ赤な顔で鼻を押さえながらそう応える。

（令子お姉ちゃんの手の隙間から零れてくる赤い何かは気のせいだ
と思いたい）

忠緒が赤い顔で俯いていると。

「タダたん、早くノイズをやつつけないと」

「……そうだよね……みんなあのノイズが悪いんだよね……フフフフフ

体から黒い何かを噴き出す忠緒を見てラルは少し後ずさる。

「！」、これは…これが噂の病化

その後、ノイズは無事退治されたがそのやられっぷりはラルが涙を流しながら同情するほどの物だったといふ。

「なるほど、そいつ詫びなのね」

放課後、学校帰りの公園で知られた以上隠しきれないと忠緒とラルは令子に全てを説明した。

「うん、黙つてて」めんね

「仕方ないわよ、事情が事情だし。それより、そうね……よし、決めたわ！…」

「何を？」

「私があなたのサポートをしてあげる」

「そんな、ダメだよ！… 令子お姉ちゃんを危ない目に會わせたくないよ」

「それは私も同じよ。忠緒がこんな危ない目にあつてゐつて分かつ以上は知らんぷりなんて出来ないわよ」

「ラル～～」

「令子ちゃんが一度決めた事を変えないつて事は知ってるだろ、諦めるしかないよ」

「そう言つ事。大丈夫よ、お姉ちゃんが守つてあげるから」

こうして、魔法少女タダオキユートの闘いは新たなるパートナー、美神令子を加え新たなる局面を迎える事になった。

「どうでさラル、忠緒の魔法少女としての『眞とか無い？』

「任せときな姉さん！姉さんには特別に俺たちのお宝映像集を分けてやるぜ！…」

「あら、話せるわね」

一人が怪しい笑いをしていると忠緒が食つてかかる。

「令子お姉ちゃん何してるのさ…? ラルも何か憑いちゃいけない物が憑いてるよ…!」

アルベル・カモミール

「ほり、これなんか

「ぶはつ！！」「これだけで」飯は三杯は食べられるわね

「お姉ちゃんのバカ————！」

これはまた、遠い遠い何処か世界の物語。

無理やり終ります。

魔法少女！？ タタオキュー（後書き）

……、と訳で男の娘の横島忠緒のお話でした。
何で俺つてこんな話ばかり思いつくんだり……。

「G.S美神 × めだかボックス試し書き」（前書き）

Zigzag Talkerからの修正を加えての移動です。

連載物の更新が滞っているのは「メンナサイ」です。

めだかボックス、アニメ化嬉しいです。話は何か重くなつて来てる
けど……

「G.S美神×めだかボックス試し書き①」

試しの一箱「謹んで拝命せよ」

箱庭学園生徒会長、黒神めだか。
くろかみ

彼女は生徒会室の自分の席で書類の整理に没頭している。幼馴染である人吉善吉ひとよしそんきちもまた、彼女の仕事を手伝っている。

其処に一人の男が扉を開いて入つて来る。

彼の名は箱庭学園二年四組、横島忠夫。

「めだかちゃん、頼まれていた窓枠の修理終わったよ」

「御苦労！！ 何時もながら横島一年生は仕事が早いな」

「と、ゆーか俺は生徒会の役員じゃないのに何で生徒会の仕事を手伝わされどるんじや？」

「諦めて下さい、横島先輩。めだかちゃんにその無駄に凄い器用さを知られたのが運の刃きつス」

人吉善吉は心から同情した表情で横島の肩に手をやる。

「しかし、この所こういった雑用ばかり押し付けられて疲れきったこの体はその見事なまでの胸の中で休ませてもうらうしか」

「ちょ、横島先輩何を！？」

「ん？ そんな事でいいのなら私は別にかまわんが」

「それじゃ遠慮なく、めだかちゃんつ！…」

「駄目ですつてば、横島先輩！…」

横島は善吉の制止を振り切りめだかへのルパンダイブを決行する。
……が。

「どうせやつーー！」

其処に突如その場に現れた阿久根高貴に横島は殴り飛ばされる。
あくねじゅうき

「ふつ、汚い手でめだかさんに触れようとするからだ」

その後、柔道技のオンパレードによつてズタボロにされ、肉塊とも表現するような姿になつた横島を見下しながらそう言つ。

「？？
善吉、阿久根書記は何をあんなに怒つておるのだ？」

うぜ
めがたきはにきるやうにしての危機感を持たなければいいと思

善吉が溜息を付きながらそう呟いていると、

「あー、死ぬかと思った」

横島はあつさりと復活してきた。

そんな横島を見ながら阿久根は不思議そうな顔をしながら話しかけ

「何でお前の様な異常性^{アブノーマル}な奴が一三組に入れられなかつたんだろうな？」

【そ、だな、横島は異常性や過負荷じゃなく、ビックリしたと云つて普通にカテゴライズされたと思つぜ】

「お姉様」

黒神めだかに姉と呼ばれた女性は名瀬天歌。なせよひか 実はめだかの姉で、黒神くじらと言つ名前だ。

「天歌、何じやその否普通とゆーのは、ワイはれつきとした普通の一般人だぞ」

【てめえ、俺様が古賀ちゃんを改造して使える様になつた再生能力を生まれつき持つているくせに普通面しやがるとはふてえ奴だな。とこりで横島】

「何じやい？」

【俺様に改造される覚悟は出来たか？】

「出来る訳ないじやろーが！..！」

【ちつ！我儘な野郎だな】

「全くだよ。名瀬ちゃんがせつかく改造してくれると云つてゐるこ

天歌の後ろから彼女を抱きしめ、頬を膨らませながらうつ云つのは古賀いたみ。

元々は普通ノーマルであつたが天歌の改造を受けて異常性アブノーマルに覚醒、十三組サードィーンの十三人バーティの一員となつた少女である。

「改造されるのを嫌がる事を我儘とは言わん」

横島が名瀬や古賀と言つていると書類の整理が終わったのか、めだかが書類を持って立ち上がる。

「良し、出来だぞ」

「めだかさん、何ですかその書類は？」

「ふつふつふつ、聞いて驚くがよい。生徒会の新役職の申請書だ」

「新役職？」

めだかは扇子を横島に向け、高らかに語りかける。

「喜べ、横島一年生。貴様の為に新たなる役職を作ったぞ！――これで貴様も晴れて生徒会の一員だ」

「……何や、嫌々……な予感しかせんが何じゃその役職とは？」

「うむつ―― 貴様の役職はズバリ『丁稚』だ。謹んで拝命せよ」

凜つ――

「凜つ――…じゃねえ――――つ――… 嫌に決まつとろりうが――
――つ――」

「もう、我儘な奴だな」

「あ―――、もう――――――… この姉妹は――――――つ――」

「ならば、きかいじま喜界島会計の様に日給を払つてしまひ。255円でいい
だ？」

「何なんや――、そのピンポイントな金額は――」

「決定だな」

「諦めましょう、横島先輩」

「くそ――――つ――… 何でワイはこの手の女に逆らえんのじゃ――
――つ――？」

答え・横島だからです。

試しの一箱「『男の娘』という人種」

「実は田安箱にこの様な演劇部からの投書があつたのだが」

箱庭学園生徒会長の黒神めだかは相談事が書かれている便箋を読みながらそう呟く。

「どんな相談なの？」

そう聞き返したのは人吉善吉の母親、人吉瞳ひとよしひとみである。

「はい、何でもある登場人物に相応しい人材を探してほしいとの事です」

「どんな登場人物なんだよ、めだかちゃん？」

「うむ、ある富豪に仕えるメイドらしい。部員の中にはそのイメージに相応しい人材が居ないとの事だ」

「それはおかしいわね、演劇部には美少女が揃っている筈なのにメイド役に相応しい子が居ないだなんて」

善吉の疑問にめだかは答え、瞳がさらに疑問を投げかける。

「それなんですが何でもそのメイドとやらは『男の娘』という人種らしくて捜しているのは女装が似合つ男との事です。ところで横島丁稚は何処へ行くのだ？」

娘^こと言う件の辺りから横島はめだかに気付かれ無い様にソロソロと逃げようとしていたが生憎とめだかの視界からは逃げられなかった様だ。

「ああ、そうだ!! 忠夫くんが居たじゃない」

「ひ、瞳さん。横島がどうかしたんですか? まさか横島に女装をさせることもりでは……」

「そのつもりだけど?」

よこしまはにげだした。

しかし、どびらがひらかない。

「ああ―――っ!! 鍵が、鍵が、扉が開かない―――っ!!
「よくは解らぬがどうやら貴様の出番の様だな、横島丁稚」

ほくそ笑むめだかの手は机の下に隠されているスイッチを押している。じりじり扉の開閉ボタンらしい。

「ちょっと待つて下さいめだかさん。いくら何でも横島に女装は無理があり過ぎるでしょう。横島にやらせる位ならまだ善吉くんの方が」

「ちょっと!! 阿久根先輩、何を」

「うへへん、それはそれで魅力的な提案なんだけど」

「お母さんまで何を! ?」

「忠夫くんには実績があるんだよね」

瞳はそう言いながら笑顔で十数枚の写真を取り出す。その写真には可愛らしい三才位の美少女が写っていた。（例えて言つなら、てぼてぼ唯緒ちゃん）

「わー、可愛い」

「本當だ、見て名瀬ちゃん」

【確かにこの可愛さにはたすがの俺様も心踊らされるな】

喜界島、古賀、名瀬の三人は写真の女の子を見て頬を赤らめているが逆に横島の顔は青ざめて行く。

「な、何で瞳さんがその写真を……」

「だつてこの写真は私が撮つてあげたんだし」

「え……も、もしかして瞳さんはウチのおかんと……」

「うん。田舎子さんは心の友と書いて“心友”だよ^{しんゆう}」

「お、お母さんが撮つた写真で横島先輩が此処まで慌てるところは……」

「もしや、この愛らしい少女は横島丁稚なのですか?」

「ピンポーン、大当た「わー、わー、わー、わー！」」

「五月蠅いぞ横島丁稚【平伏せ。】」

「ベジタブル！」

卷之三

慌てて瞳の発言の邪魔をして横島たかめたかの言葉の重みによって地面にめり込む勢いで平伏せられた。

「でも、話を戻し�しよ。」この牛は横島万雄を出向をむるところ

事で

それしや横島先輩があんまりにはも……」

が

「横島先輩で行きましょ、うー！」

一 善吉くん 看て奴は

「嫌いや…………つ……！」

「あつ、横島が逃げた」

横島は飛び起きて窓から逃げ出そつと駆け出し、古賀がそれを咎める。

だが、すでに横島の前には瞳が待ち構えており彼女は背中のランドセルから数枚の布と化粧道具を取り出すと頭上に放り投げその手には裁縫道具が握られていた。

「んふふう。逃げられないよ、忠夫くん」

瞳はほくそ笑むと超スピードで横島とすれ違う。

『お母さんのたしなみ』

『華麗なる創造神……』

「ふう、いい仕事をした。皆、どうかな？」

手の甲で額の汗を拭き撮りながら瞳はそう呟き、その手には横島が身に着けていた制服があり、めだかや善吉達も横島のその変わり様に啞然としていた。

「なつ！？」、「これは……。横島、貴様……」

「ば、馬鹿な！……。横島がここまで可憐な美少女に

「よ、横島先輩？」

啞然としていたのは横島も同然で何時の間にか着替えさせられた自分の格好を見てワナワナと赤い顔をして震えていた。

「な、名瀬ちゃん

【す、凄え……『舞い上げた布でメイド服を創りつつ、横島の服を剥ぎ取りつつ、マッサージなどで体の体形や骨格を整えつつ、創つたメイド服を着せつつ、化粧をしつつ、横島を完璧な美少女に創り変えたがつた』まさに、華麗なる創造神。そ、尊敬するぜ】

……、そして其処に来ではならない男、黒神真黒くろかみまぐろが現れた。

「なんだか賑やかだけど何の騒ぎだい？」、「これは……」

「！お、お兄様……」

【……あ、兄貴……】

めだかと天歌の姉妹は来てしまった兄に戦慄を覚えながらも僅かばかりの理性に期待していた。

……無駄と知りつつも。

「そつか……、解つたよ忠夫ちゃん」

「な、何をじや？」

真黒は一呼吸すると満面の笑みを浮かべ、両手を広げて叫ぶ。

「忠夫ちゃん、君の気持は解つた！！ 今日から君も僕の妹だ。さあ、変態の胸に飛び込んでおいで！！」

そんな真黒の胸に飛び込んで来たのは……

「怨敵退散！！」

「『ほ』はあつ……」

乱神モードで真黒を殴り飛ばすめだかと、

【凍つて燃える！】

「ぎやぎはあつ！！」

見た事のない能力^{スキル}で真黒を凍らせて燃やす天歌であった。

「な、名瀬ちゃん……、その力は？」

【兄貴への身も凍る様な拒絶感から生まれたこの過負荷^{マイナス}を、兄貴への燃え盛る様な怒りから生まれたこの過負荷^{マイナス}を、俺は『凍る火柱^{アイスファイア}』と命名する】

何と言う事でしょう！？

名瀬天歌は兄、黒髪真黒への拒絶感と怒りから過負荷^{マイナス}を、覚醒してしまいました。

皆が睡然とする中。

「では行くぞ、横島丁稚」

「へ？ なつ！ い、嫌じゃ―――っ！ 一 放してくれめだかちゃん。
後生だから勘弁してくれ―――っ！」

めだかは未だに呆然としている横島の首根っこを掴んで引きずつて
行く。気がついた横島が暴れるがすでに後の祭りであった。

「安心するがいい、貴様が横島丁稚という事は秘密にしてやる。だ
がこれ以上抵抗するというのであれば……、解つているであらう？
「うう、何で俺ばかりこんな目に……」

答え、横島だからです。

後日談……

演劇部の舞台は大盛況の内に終了し、入部希望者も増えたといつ。

生徒会には演劇部から謎の美少女（年）の正体は誰か、是非正式部
員との問い合わせがあつたがめだかは本人との約束だから秘密だ

とほぐらかしている。

そして生徒達からはファンレター やラブレターなどが大量に送られてきたがすべて横島の手によって焼却処分されていた。

そして、瞳から送られて来た写真を見た百合子が大急ぎで帰国の準備をしている事を横島はまだ知らない。

終ってください。

「G.S美神×めだかボックス試し書き」（後書き）

脈絡の無さは試し書きと言つ事で御勘弁下さい。時系列的には生徒会戦挙編の前と言つ所です。

後、名瀬天歌のセリフの括弧が【】なのは原作での吹き出しがイメージしました。

天歌が自身の改造ではなく真黒への怒りから過負荷に目覚めたのもこの話の中だけの設定と言つ事で勘弁して下さい。マイナス

「いやうの軍團、來襲……」

チョンチョン……

今田も朝が来た、さわやかな朝だ。
だが、俺はそんな気にはなれない。何故ならば……

「せんせーーーーー！」

来た！朝になると俺の都合など「れつぱつも考へず」にシロは俺を
散歩に誘いに来る。

普通の散歩なら別にかまわない。だが、それが数十キロにも及ぶ全
力疾走となると話は別だ。

「先生ー！あ、散歩に出かけるで！」
新しい朝が来たで！
よ、希望の朝で！

「それは散歩ではなく体操で！」
やるよ

「ん？…………」「の瓶は……！」

「お、お主は楓殿！？ 何の用事で！」
やるかーーー！
「忠夫殿に勝負を挑みに来たで！」
やるよ
「何を言つてゐるだ！」
やるよー先生は拙者と散歩に行くんで！」
やるよー

あいつ等は……

今、外でシロと争っているのは長瀬楓。 麻帆良学園都市にある女子中等部の三年生だ。

仕事がらみで知り合った女の子だが俺の闘い方に思つ事があつたのか、それ以来何度も勝負を挑まれている。

麻帆良学園女子中等部、あそこは正に地獄だった。

通っている娘は皆、ナイスバディだが中学生、中学生なのにナイスバディ、手を出せばロコペード一直線なのだ、よく耐えた、偉いぞ俺。

特にあのルチ将軍！ 木乃香ちゃんの爺ちゃんは俺を木乃香ちゃんの婿にしようと躍起になつてたからな。

「此処に来たのは楓殿だけでござるか？ 刹那殿や古菲殿は？」

「皆には内緒で来たでござるが、今頃悔しがつてこの頭でござるな

ともかくこれ以上騒がれてはたまらない、後で文句を言われるの俺なのだ。

「おこ、いい加減にしないか！ ！ 近所の迷惑を考えろ！ ！」

「先生、お早うござる！ ！」

「よつやく田代めりれたでござるが。 さあ、さつやく勝負でござる

「……」

そう言いながら一人は扉を開いた俺の所に駆け寄つて来る。

「まあまあ、二人共。忠夫殿の迷惑も少しは考えるでござりぬよ、一
ノーン」

「……そう言つお前は此處で何をしとる……」

「朝の挨拶のついでにでえとの誘いに来たでござるぬよ」

この何時間にか部屋の中で逆さまにぶら下がつている娘は川端綾女。乙女学院の生徒だ。

乙女学院、それはテタントのテストケースとして創立された神族、魔族、妖怪、そして人間が集められた学校の事で何故か女子校だ。

そして今、何故か俺はその乙女学院に交換留学生として通わされていてこの綾女という忍者オタクの少女はクラスメイトの一人である。中々の美女ぞろいだが創立にキーちゃんとサツちゃんが絡んでいる事、学院長がノーやんというあからさまに怪しいぢぢいなのでもし女生徒に手を出したらどうなるか分からないのでナンパは控えている。つまり、あの学校も俺には地獄に等しい。

後、乙女学院には神界からモビィ・モ・ラールと言つ奴と魔界からヤクト・ヤン・キーと言つ奴も通つてゐる。この一人、何故か妙に俺と氣があつ。

「おのれ綾女…… 何時間に先生の部屋の中に……？」

「勿論、何時間にやらでござるよ」

「油断のならない女で」「やれるな」

(何か嫌な予感がするな。ここ等が言に争つてゐる間に逃げるか)

そうして、そーと氣付かれない様に歩いて行き、もつ少しで道路に出ゆつとした時…

「はあはあ……よ、よつやくたどり着いたで」「やれるな」

此處には居ない筈の女性が現れた。

「師匠——！　会いたかつたで」「やれるよ——！——！　びふてき、やつと師匠に会えたで」「やれるよ」
『もー、もー』

この娘は千影流忍一族の一女でしのぶとこつ名前だ。“びふてき”とは彼女のペシトというか友達で、一足歩行する小さな牛である。海上での除霊の際、俺一人だけ遭難した事がある。その後俺は藍蘭島という島に流れ着いた。

その島は12年前の“漢だらけの大船釣り大会”的大会中に起つた100年に一度級の大波に巻き込まれた為に男が一人もいない女性だけの島だった。

女性だけ……俺は今度こそ本物のハーレムじゃ……！……と浮かれていたんだが其処に居る女の子は殆んどが年齢対象外、こんなこつたるーと思つたよ、チクショー——！

たまに年齢的にOKだと思つたら想い人がいたり（その相手がベンギンだと知つた時は思わず呪いをかけそうになつたが）見るからに幼児体型だつたり……

12年ぶりに現れた男と言う事で「こと」という婆さんには婿殿よばわりされるし女の子達には追いかけ回されるしで大変だった。

何しろ男に免疫がないせいか風呂に入つても平氣で裸で入つて来るし、もし一人だけでも手を出したりしたらあの婆さんの事だ、島の女性全員と関係を持たされる事だつたに違ひない。

いや、それはともかく……

「何でお前が此処に居る？藍蘭島の周りには大渦が渦巻いていて外には出れない筈だが」

「師匠を捜して彷徨い歩いていたら何時の間にか此処にたどり着いていたで」「ざるよ」

「何處の響良牙だお前は……皆は元氣だつたか？」

「まあ、皆それなりに元氣でやつてるで」「ざるよ。……すず殿は少し寂しそうで」「ざつたが」

「そつか……」

思えば彼女には可哀想な事をしたな、今度会いに行つてやるか。

「ところで忠夫殿、その女性は誰で」「ざるかな？」「ずいぶんと親しそうで」「ざるな、ニンニン」

「先生？……師匠とはどういう事で」「ざるかー？ 詳しい説明を求めるで」「ざるよ————」

しまつた、ここに等の事を忘れていた。

「拙者の如はしのぶと申すで」
「何を申す！ 先生の弟子は拙者で」
「ふむ、この際拙者も忠夫殿に弟子へりするで」
「それは、なにすあこであ」
「」

「」
「何物騒な相談をしどるか」

「先生！ 話をばぐらかわないでほしこ」
「師匠！ 拙者は苦労して此処まで来たので」
「なでなでしてほしこで」
「なでなで？ 何とも甘美な響きで」
「忠夫殿、スクナとの鬭いの時は拙者も頑張つたで」

「」
「」

「ええ――――」
「」

その後、横島忠夫は「『じれのフハチ』と尊ひ、彼の周りで『じれ』
が流行したとかしなかったとか。

『ヨコチマ、一緒にゲームをするでいざるでちや』

「横島さん、クッキーを作ったから食べてほしこでいざるねん」

「忠夫クン、一緒に走ろうつよ…でいざる」

「忠夫様、この藁人形と一緒にあやねを呪わない？でいざるわ」

「もう勘弁してくれ-----」

終りみよう。

「ノルマの軍団、来襲……」（後書き）

と、言つて思つたまま書いたらこうなつた。

何故か横島つじざるつ娘と相性がいいよね。

ネギま！・ハイスクール・オブ・ブリッヂ・藍蘭島・じいちゃん・まぜにしてかなりのカオスになつてしまつた。

殆んど探索日記だなこれは。

では、やつこつ事で。（・・・・）ノシ

「メイドさん……」

「全く、アンタはとんでもないドジをかましてくれたわね……」「す、すんませーーん」

ある日、美神除霊事務所の面々はある企業からの除霊依頼を受けていた。そして横島のちゅうとしたミスから危つへ悪霊を逃がす所だったのである。

「罰として今後半年間給料無し……」「そんな殺生なーーっ……」「み、美神さん。それはいくら何でも」「と、言いたい所なんだけど其処までするとママがつるそこから勘弁してあげる」「た、助かったあーー」「良かつたですね、横島さん」

安堵の表情を浮かべる横島であったが、美神の目には怪しい光が灯っていた。

「安心するのはまだ早いわよ。横島クンには”こんな事もあるつかと”用意していたコレを着てもうひつわーーー！」

そう叫びながら美神が荷物から取り出したのは……、

一着の『メイド服』であった。

「み、 美神さん? ……」

おキヌが皿を丸くしていると。

「み、 美神さん……、 アンタは一体どんな”こんな事”を想定して
いたんじゃ―――――つ――!」

そして数日後……

「やあ、 令子ちゃん。 横島君がまたミスをしたんだって?」

オカルトGメンの西条は喜々とした表情で事務所に入つて來た。

「そりなのよ、 幸いに除霊はうまくいったけど危うく除霊失敗で違
約金を支払うはめになる所だつたのよ」

「全くしうがないなあ横島君は」

そつ言いながらも西条の顔は清々しいまでの笑顔に包まれている。
よほどライバルである横島の失敗が嬉しい様だ。

「ところでその横島君は？」

「今、罰を『えている所よ。何をしてるのー』お密様よ、早くお茶を持つて来なさい、横島ちゃん！－！」

「……ちゃん？」

そう呼ばれて、台所から現れたのは膝裏までもある長く艶やかな黒髪に真っ赤なリボンを付けて、あらう事がメイド服にその身を包んだ美少女だった。

そう、何時ぞやのエクトープラズムスースを使って女性の姿になつた横島だった。

どうやらこれが美神が横島に『えた罰らしい。

「いらっしゃ……何だ、西条か」

「な……な、な、な？ よ、横島君のかい？」

「こりつ！－お密さまに對して何よその態度は。ちゃんと教えた通りにやりなれこ－－！」

「で、でも美神さん。いくら何でも西条相手に……」

「一週間、罰を延長しましょうか？」

「わかりました……」

横島の顔は悔しかと恥ずかしさで真っ赤だった。

西条は西条で何が何やらと混乱していたが田の前の美少女から田が離せないでいた。

おキヌやシロタマもそんな西条を見て「あはは」と笑う事しか出来なかつた。

「い、い、いらっしゃいませ」

「違つでしょ……」はい、もう一度……」

תְּהִלָּה

美神はパンパンと手を打つてダメ出しをする。
横島は俯き、目尻に涙を浮かべながら更に顔を赤くする。

「お、お帰りなさいませ……ご、ご主人様……」

西条は大量の鼻血を噴き出してぶつ倒れた。

——ああ、西条さん！」

「拙者も初めて食らつた時は一昼夜生死の境を彷徨つたでござるよ」「ほーーーっほほほほほほほーー！ 横島ちゃんの正体を知つてい
る西条さんでさえこの有様なんだから美神除霊事務所の看板娘とし
ては申し分ないわ。さあ、稼ぐわよー！」

「うわ、羨うよ。それが目的だつたらしこ。

「ううう。何でワイがこんな目に……」

それからというもの、美神除霊事務所は美神の作戦通りに大繁盛した。

美少女メイド事務員がいるという事で依頼者が殺到したのである。美神に逆らえない横島は泣きながらもメイドとして対応せざる他なかつた。

七八三

「マニア似てこなー—————！」

と、飛びかかって来るマザコンや、

「へ、美しい…」

と、首筋に牙を突き立てるつとあるバンパイアハーフや、

「やあ、今日も綺麗だね横島ちゃん」

と、花束片手にせりへるエセ紳士や、

「お…ひくくくく、オンナ—————！」

と、野生に還る薄い影の虎などは遠慮なしに半殺しの罵に呑ませていた。

(特に、女性陣の手によつて)

そんなある日……

『美神オーナー、お客様です』

「お客?仕事の依頼者なの」

『い、いえ。横島さんの…』

「俺の何だ?」

人工幽靈が返事をする前に部屋の扉が開く、横島は条件反射で挨拶

を……してしまった。

「お帰りなさいませ、『主人様』

ペコ

『……お母様です』

「…………何をしてるんだい？……忠夫……」

自分の母親、GM横島百合子に。

「へ…………お、お袋……………？」

「た、忠夫……お前は、お前は……」

百合子はメイドの姿をしている横島の全身を見ながらワナワナと震えていた。

「せ、先生の御母堂でござるか？拙者は横島先生の一番弟子のシロと…」

「このバカ犬……今はそんな事を言つてる時じゃないでしょ……」「犬じやないで！」わる、狼でござる……」

「よ、横島さんのお母さん。」「これには深い訳が…」

「わ、私は止めたんですよ。でも横島クンがどうしてもやりたいと「美神さーーん！」「アンタって人は…………」

事務所のメンバーが混乱に陥つてると百合子はゆづくつと近づいてきて横島の肩をがつしりと掴む。

「忠夫、お前は……」

「堪忍や———おかげ——ん……これにはチヨモラシマより深い

訳が――――――

横島は母親のお仕置きの名を借りた死刑執行に怯えていたが、百合子の反応は横島達の考への遙か彼方の斜め上を行つていた。

「お前ひて子はなんて親孝行なんだい――」

「……く?……」

「私達は娘が欲しかったんだよ、そんな私達の為に娘になつてくれ
るなんて……ああ、私はお前を誇りに思つよ」

「あの～～、もしもし…お母様?」

「ひしちゃいられない、さあ忠夫! 買い物に行くよ。女の子には
色々と買ひそろえなければならぬのがあるからね――」

「ちよつと、落ち着いてくれよ母さん! 僕は別に本当の女になつた
訳じや……」

「ひひひ――女の子がそんな乱暴な言葉使いをしづや黙田じやないか
――」

「話を聞いてくれ――――――」

美神達が口を挟む暇もなく、横島は百合子によつて連れられて行つ
た。

「み、みみみ、美神わはーん! 横島さんが
「はっ! あまりの事に動けなかつたで! ひやる
「どうするのよ美神! ?
「どうあるつて…どうすればいいのよ――――――! 」

それからとこいつもの。

「さあ、唯^{ただお}緒次は」のドレスを着て『うらん』

「だからな、母さん！俺は別に女になつた訳じゃなくて……」

「私」

「だから、この姿はエクトープラズムスーツで女に見えるだけで俺は

男……」

「わ・た・し」

チャキッと首筋に柳刃包丁が当てられる。

「わ……だ、だからね、私はこんな姿をしてるけど見せかけだけで本当はちゃんと男の子なんだよ」

「その事なら心配はいらなによ。ちやんと考えがあるからね

「な、何の？」

「だからお母さんに任せとおきなやご。あつ、この//ースカートも似合いそうだね」

「うへ、ワイは一体だ」

チャキッ

「……私は一体どつなるの～～？」

村枝商事において。

「ケンちゃん、お久しぶりね」

「おおつー！横島君、どうしたんだい？」

「実はある事情があつて日本で暮らしたくなつたんで専務を何処かにやつてうちの旦那を本社勤務に戻してくれない？私も出来るだけ

会社に貢献するから」

「うへへむ、そうだな」

「社長！何を悩んでるんですか、私は反対ですよー！」

「社長、丁度タンザニア支社の係長のポストに空きがある
「クロサキ、てめえ――――――！」

某・異空間。

「…」
「…」

『アーティザン・エ・マニア』

『幸い、今はエクトプラズムスースを使っていて女性の姿ですからね。因果律を歪めて性別を変える事はそう難しくありません』

『なじむのか?』

『やつましょー!』

『ええ、解りますとも』

『おもろくなつて来たでーー!!』

卷之三

卷之三

三柱……もとい、一人と二柱が笑つてゐる後ろで百合子の送り迎えを担当していたジークはそのプレッシャーに耐えきれず、立つたまま

それから暫くの時が立ち、横島忠夫改め、横島唯緒は完全な女性体になっていた。

言葉使いなども百合子の手によつて変えられていた。
そして横島はといふと何時も通りに事務所でメイドをしていたのだが。

「何でこんな事になっちゃったのよ――――！」

彼女は今、全力で逃げていた。何からと言つと……

「横島さーーん！！ 僕は雪之丞達と違つてフリ です。僕が貴女にルシオラさんを産ませてあげます！！」

「そんな直接的な表現はやめて――――！」

「待ちたまえピート君、君はまだ高校生だろ。ここは社会人である僕が」

「アンタだけは何があつても絶対に死んでもイヤッ！！」

「横つちーー！！ 僕はずつと以前からお前の事を――――！」

「それはずつとホモだつたつて事じやない――――！」

「横島―――！」とは別れて來たぞ。僕がお前をママにしてやる――――！」

「何を考えてるのよ、このド外道――――！」

「横島サーーーン！！ ワッショ――――！」

「獸姦はいや――――！」

男達に連日追いかけ回されていた。

美神達はといふと、

「ふふふふふふ。横島ちゃん、安心しなさい。貴女は私が」

「そつはいきません。横島さんの相手は私が」

「先生は誰にも譲らぬでござるよ」

「アリシマは私の物よ。この九尾の呪石賭けて

そんな彼女達の手には【男】と文字を刻まれた文珠が握られていた。

「ルシオラーーーー、助けてーーーーーーーー！」

アリシマ、早く私を産んでネ

「ルシオラーーーーーーーーー！」

その叫び声は夕陽の空に向處までも響いたといふ。

ちりんちりん！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3673v/>

こんな、横島忠夫はどうでショー!!

2011年11月2日13時17分発行